

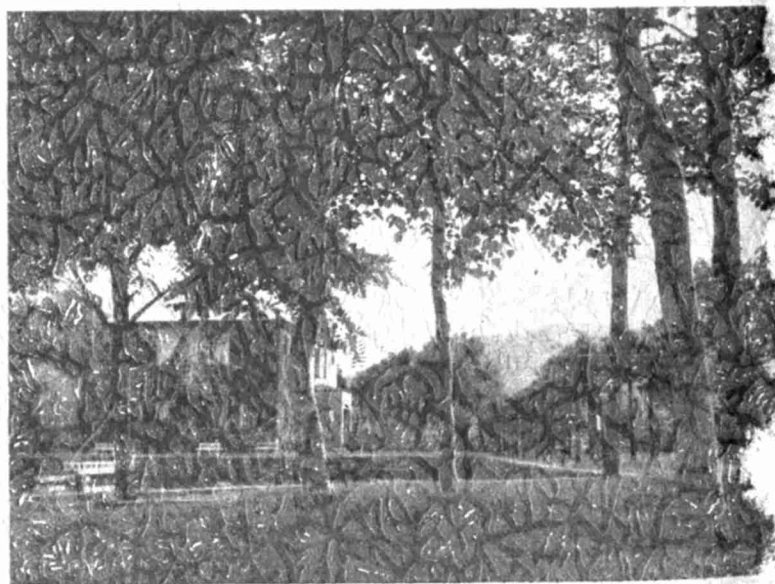
鮭 鱒 彙 報

第 四 十 三 號

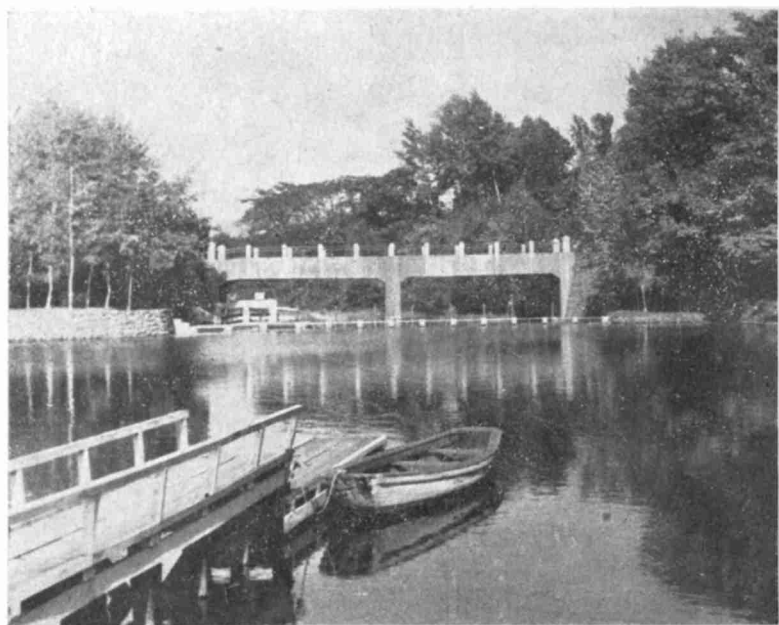
昭 和 十 八 年 六 月 二 十 五 日

解 散 記 念 號

北 海 道 鮭 鱒 保 護 協 會



北 海 道 水 産 殖 化 場



北海水道産卵孵化場養魚池風景



眞寫念記者席出會總ノ後最會本

(て於に堂會公市路釧 日八十月六年七十和昭)



會協護保
長會代三・長事理代初
氏男芳田半



會協護保
長會代初
氏郎仁池小



會協護保
長事理代二
氏俊信田野



會協護保
長會代二
氏龍垣稻



會協業事化鯿鮭道海北

長事理代初

氏一季石小



會協業事化鯿鮭道海北

長會代初

氏郎三晴藤内



會協業事化鯿鮭道海北

長事理代二

氏郎一藤井新

解散記念號 目次

表紙
繪第十四回本會總會の景
本會歴代首班の横顔

解散ノ辭……………半田芳男(一)

★回顧

北海道鮭鱒保護協會の回顧……………半田芳男(三)

解散に名残を惜みて……………野田信俊(八)

鮭鱒彙報の再興を祝す……………飛島貫治(九)

鮭鱒保護協會の解散に際して……………田中林藏(一〇)

孵化の恵み……………齋藤珠川(一一)

擇捉島と孵化事業……………齋藤榮三郎(一二)

鮭鱒彙報の思ひ出……………菊地覺助(一四)

北海道鮭鱒保護協會を願みて……………谷口達三(一七)

ト勝川の流れ……………水澤一郎(一八)

北海道鮭鱒保護協會年表……………(一九)

★論文

北海道水産孵化場所屬淡水魚標本目錄……………添田潤助(二三)

稻田養鯉ノ手引……………道養魚聯指導課(望)(二四)

★彙報

昭和十七年度鮭親魚捕獲採卵成績表	(三)
昭和十七年度鮭親魚捕獲採卵成績表	(四)
十勝支場昇格	(五)
白人事業場に昇格	(六)
十勝支場新装成る	(八)

★雜報

北海道鮭鱒保護協力組合文化部入會案内	(天)
北海道鮭鱒保護協力組合文化部規程	(五)
鮭鱒養殖水産組合整理せらる	(六)
十勝鮭鱒養殖水産組合解散せらる	(三)
紋別鮭鱒養殖水産組合解散せらる	(三)
根室外三郡鮭鱒養殖水産組合の解散	(六)
地方協力團體の誕生	(六)
鮭鱒養殖事業従事者の子弟教育道場現る	(六)

★會報

第十四回總會記事	(六)
解散協議委員會記事	(六)
本會功勞者記念品贈呈	(五)
會員消息	(六)
會費領収報告	(七)

解散の辭

會長 半田 芳 男

北海道鮭鱒保護協會は本年六月釧路市に於て第十四回總會を開催した際に解散を決議し、茲に大正十三年北海道鮭鱒養殖事業研究會として發足して以來十有九年の歴史の幕を閉つる事になつたのである。

本會の起原は本道の官民鮭鱒養殖事業關係者が事業の効率を増進せしむるに必要な研究調査を爲す機關として設立したものであつて、初めは水産試験場に本部を置いたが昭和二年度本道拓殖計畫の實施に伴ひ豫算増大し官營鮭鱒養殖場のみならず多數の民營鮭鱒養殖場の整備擴充を行ふ事となり本會の使命も之に伴ひ重要度を加へて來たのと且本會としては從來の事業を擴大して水産養殖行政への翼賛と鮭鱒漁業と鮭鱒養殖事業との連絡の緊密化を圖る必要を痛感したので本會の内容をも整備するを適當と認め昭和三年度に北海道鮭鱒養殖事業協會と改稱し、本部を道廳水産課に置いたのである。其の後種々の事情より觀て本道の鮭鱒養殖事業は之を官營に一元統合する事の必要を認められ昭和九年度に其の大部分が實現されたのを機とし本會も北海道鮭鱒保護協會と改稱改組して今日に及んだのである。

本會十有九年の歴史を回顧すれば會員はよく一致團結して鮭鱒保護政策への全面的協力を爲したことは鮭鱒養殖事業經營の合理化向上に或は技術の進歩に或は本事業の趣意の普及宣傳に相當の貢獻を爲したものと敢て自負するもの

である。然し重要水産資源の一たる鮭鱒の確保は時局下益々重要視さるゝ秋に於て本會の使命は必ずしも完遂されたと信ぜられないのである。今後一層の努力を要すべきであるが茲に解散を執行する以所は本會と其の職分に於て一脈相通する北海道鮭鱒保護協力組合が設立せられ、然も構成員の主なる者は重複して居る事情に鑑みれば時局下多數の團體が分立割據するの愚を避ける事が國家の要請に添ふるものであると信じ、本會は今後は協力組合の文化部會として吸収さるゝ約束の下に茲に光輝ある歴史の頁を終る事に決意したのである。

茲に解散するに當り各位より寄せられたる絶大なる御後援を深謝すると共に今後の御鞭達を願ふものである。

(一七・一二・一五記)

回顧

北海道鮭鱒保護協會の回顧

半 田 芳 男

大正六年夏の頃と思ふが千歳孵化場(當時は北海道水産試験場千歳支場)に於て官廳側の孵化事業關係者の協議會が開催された。之が端緒となつて毎年一回夏期に千歳、西別(現在の虹別支場)、高嶋(水産試験場本場)等に於て開催され且後年には民間孵化場關係者をも加へて行ふ様になつた。

此頃は本道孵化事業中興の恩人とも稱すべき伊藤一隆氏や和田健三氏や藤村信一氏は已に第一線を退かれて藤井顯氏や森脇幾茂氏等が陣頭指揮をやり、民間側では小池仁郎、郡山甚四郎、野坂良吉、大西眞平、伊藤政治、近江幸一郎、吉田爲造、平方綱一の諸氏が縦横に活躍された時代である。筆者などは孵化事業に入門したばかりのホヤ／＼で會議の議案の整理係をつとめたものだ。

然し昭和の御代となつては以上の諸豪は夫々天壽を全うされて故人となられ現在は大西、郡山の兩氏が健在である事は誠に寂しい限である。

斯の協議會を年々開いて居る間に民間の孵化事業は急速に進展したので其の經營者や技術者の間の相互連絡を密

にして事業の効果を擧ぐる方法に關して何等かの機關を組織すべしとの意見が大正七年の會議に於て擡頭した。そこで當時水産試驗場に在て此方面の仕事を擔當して居た筆者が世話役となつて北海道鮭鱒孵化事業研究會と云ふものを組織したのは大正十三年の事である。本會は水産試驗場に本部を置き時々騰寫版刷の會報を發行して會員に頒布したりした。

設立當時の會員數は正會員として十一名、贊助會員として二十一名に過ぎなかつたが、十四年四月には正會員二十名、贊助會員六十餘名に増した。正會員とは孵化事業經營者、贊助會員とは技術員及本會の趣旨に賛する關係者である。會報は大正十三年十一月に第一號を發刊し、次いで十四年一月、同三月、同四月と僅か四回で終つたに過ぎない誠に微々たる存在であつて、今日から觀て汗顔の至であるが、これは十四年七月筆者は水産課に轉勤したので一時中絶するかの状態になつたが、大正十五年の三月小石季一氏が水産課長として赴任さるゝや本會の趣旨に大に共鳴されたと云ふよりも北海道には鮭鱒孵化事業は絶對的に必要であるから、今後この施設を大に興さねばならない。就ては外廓より贊助する機關も必要であるとの意見から本會の内容を強化擴充し本部を水産課に置く事にして組織する様にとの命があつたので、種々研究の結果北海道鮭鱒孵化事業協會として昭和三年六月に發足した。當時の會長には内藤産業部長、理事長には小石水産課長と、理事に森脇水産試驗場長と筆者が當り會員も官民關係者を網羅する豪華版であつた。

斯様に本會の輝かしい發足をした事は前述の如く小石課長の意見に依るものであるが、斯うした意見が出る根元は何處にあるかと云へば昭和二年度に第二期拓殖計畫が實施されて千歳、西別、留別の三官營孵化場が水産試驗場の支場より獨立して本廳直轄の國費經營の孵化場となり、又當時四十四箇所の民營孵化場は從來の少額なる地方費補助より發展して設備の新設改造と事業費への五割國費補助と云ふ劃期的助長政策へと飛躍したので、機を捉へるに敏なる小石課長は此場合に於て官民同志の連絡を緊密にして事業の効果を増進せしむべきであるとの卓見から出たものであらう。

斯くして本協會は本道鮭鱒蕃殖政策への協力者としていろ／＼の役割を演じたが、主なるものを捨て見るならば先づ機關雜誌「鮭鱒彙報」の發刊である。之は昭和四年五月一日に第一號を發行した。量的には小さいものであるが質的には相當に業界、並に學界から認められて今日に及んでゐる。次は孵化事業統制への推進力となつた事である。本道孵化事業は其の創始は明治十一年の古きに在りて爾來官民協力して其の擴充に勉めた結果、昭和初年には官營三、民營約五十の孵化場を數ふるに至つた。然し各自の事業は個々に獨立經營さるゝ爲に一朝逆境に立た場合特に設備の改善擴張を行つた後に斯様な事態になると忽ち財政難に逢着して、之が事業の圓滿遂行を阻害する因となる例が頻々として起つて來た。此の外に種卵の相互融通や技術員の交流等經營關係より考へて之等の事業は一元的に統制すべきであるとの結論に到達するのであるが、當時の自由主義的精神の洋溢する時代にはこの統制は難中の難事であつた。そこでこれを取纏めるには本協會の使命として恰好のものであるとの考から熟慮計畫を進めた結果昭和八年度末に關係者一堂に會して協議し一、二の難關に逢着したがよく之を克服して翌九年四月に三十八箇所の民營孵化場を移管し三官營孵化場と統合して北海道鮭鱒孵化場が設立さるゝに至た。

此舉は裏面に於ける影役者として本協會の演じた役割は實に大きいものであつた。此前年水産物検査事業の移管を行ふに當りては事態紛糾を重ね遂に政治問題に迄發展し慚く收まつた事に對照すれば感慨の深きものがある。

此外に孵化事業の普及宣傳や鮭鱒に關する知識の涵養やいろ／＼の事業が擧げられ、然も相當の功績を残したと

思ふが茲では割愛しておく。

六

民營孵化場を移管して事業が統制さるゝと共に本協會の使命達成に更に一段の重要度を加へたのであつて、その中で特に重要な事項は孵化事業に依る受益者たる鮭鱒漁業者の協力を強化する事である。即從來の協會は主として直接孵化事業に携る者に依りて構成されて居たのである爲に孵化事業と鮭鱒漁業との關聯に於て何か物足りなさがあつた。そこでこれを是正することが必要であるとの觀點から先づ昭和九年十一月に北海道鮭鱒保護協會に改組したのである。然し本協會は専ら精神的文化的方面より孵化事業の發展に協力するものである事は前身の協會と異なるところはないが此度は鮭鱒漁業者に強く呼びかけて出来るだけ多くの業者を此の傘下に收めて其の協力を求めたことは一段の進歩と言へやう。

本協會は斯様な經過を迎て成長發展して來たが然らば今回之を解散するに至つた理由は何に依るのであるか。之に就て語らねば本文を草した意義がなくなるのである。

民營孵化場の移管に伴ふ民營事業の後始末又は事業を無償を以て國に寄附する事に伴ふ多年の功勞に酬ゆる等の事情を考慮して孵化事業中親魚捕獲は五ヶ年間從來の經營者に委任經營し、親魚處分に依る利益を以て以上に充當せしむると云ふ道廳の親心であつた。然し五年を経過したが豫算の都合にて道廳は直に全部の事業を吸収する事が出来なかつたが其の場合親魚の収益を其の儘懐にすることは妥當でないから、或程度これを孵化事業に還元する事となつた。それには何等かの統制團體を組織して之に當るべきであると云ふ指導に基き北海道鮭鱒保護組合が設立され、稻垣龍氏が主宰者となつて孵化場への物質的協力に勉められたのである。この保護組合は昭和十六年四

月以降は更に發展的解消を遂げて北海道鮭鱒保護協力組合に改組されて今日の活動を實現するに至つた。

然るに時勢は急轉回し一切の機械は戰爭遂行に適應する様に進まねばならなくなつては本協會と保護協力組合とは或程度同じ仕事を爲し然も構成員も重複しておる點より觀て兩者が合體して實踐力を強化する事が國家の方針に添ふ行き方であつたので茲に本協會を解散して會員の希望者は保護協力組合の文化部會に吸収さるゝ事になつた次第である。

觀じ來れば彼の眇たる孵化事業研究會が十有九年間に保護協會に發展し其の間本道鮭鱒漁業資源の培養に幾分たりとも貢獻し得たことを想へば茲に解散の舉に出たとしても何等の心残りはないのである。然も事實上本協會は保護協力組合の文化部會として今後も充分其の使命を發揮し得るものとすれば再生再出發の意氣を以て一段と飛躍すべきであらう。

唯茲に感慨の深きを覺ゆるものは十有九年の間互に議論に花を咲かせ、或は總會後の見學旅行に奇談逸話を殘した會員中の多くの物故者諸氏と本會が斯く迄に成長し首尾よく發展的解消を遂ぐることを得た喜びを共にする事の出来ないので残念と思ふことである。

(一七・一二・二〇記)

解散に名残を惜みて

北海道水産孵化場長 野田信俊

呱呱の聲を上げて以来二十五年、光輝ある歴史と幾多の功績を揚げた北海道鮭鱒保護協會は今回解散することになった。それは水産新體制に基き昨年發足した北海道鮭鱒保護協力組合に統合せらるる爲で時局重大なる秋國家の要請に即應した措置で、當局者の英斷と云はなければならぬ。而して兩者は同一使命を持つものであるから前者は解散しても其の精魂は永遠に不滅で正に發展的の解消とも云ふべく慶賀の至りである。然しながら一抹の淋しさを禁じ得ないのである。

回顧すれば保護協會は鮭鱒と共に生る眞摯な水産人の集團であるだけに事業の改善發達を圖ることは頗る眞剣で常に技術的經濟的研究を怠らず絶へず協議會等を開催し事業の發展を策すると共に昭和四年には機關雜誌鮭鱒彙報を創刊して啓蒙運動に乗出す等積極的に斯業の發達に不斷の活動を續けたのである。又何時の會合でも卓抜なる意見の簇出で中々殷なもので、或る時等は口角泡を飛ばし激論を闘はし立廻りも演じ兼まじき熱心さを示したものである。然し流石剛腹な紳士の集りである。會議が終ると後は大風一過で何の蟠も残らず實に和氣霽々たる風景が展開せられ觀る者をして嬉しい感じを抱かしたものであつた。之れも今は良い思出の種である。

其の様な熱意があつたればこそ北海道の鮭鱒孵化事業の成績は大に揚り、技術的にも裝備の點にも長足の進歩を遂げ今日の隆盛を來す基礎を築いたのである。其の偉大なる功績に對しては滿腔の謝意を捧げるものである。

今は決戰體制下である。生産の増強は急務で殊に鮭鱒の増産は第一線の作戦とも云ふべく大切な國策であることは今更論する迄もない。舊會員諸君は協力組合の文化部に容を更へて生れるのである。何が何でも勝抜く意氣を持つて是から陰に陽に孵化事業に協力し使命の發達に寄與せられんことを希て止まない次第である。解散記念號發刊に當り聊か感懷を述べて名残を惜む詞とする。

鮭鱒彙報の再興を祝す

飛鳥貫治

永い間の親しみであつた鮭鱒孵化事業協會が愈々解散せられ、機關誌「鮭鱒彙報」も之れに連れて本號を最後として新興鮭鱒保護協力組合に繼承され、所謂發展的解消を見ることになつたとの事で、恰も生家の没落によりて養家に引取られて、資産に不自由なく、本人の腕次第、努力次第で今後の發展が期待されるといつた形であり、吾人は之れに對して、滿腔の同情を以て其の成長を期待する次第である。

惟ふに「鮭鱒彙報」は鮭鱒の専門雜誌として本邦唯一のものであり、斯界に貢獻されたことも決して尠くなかつた。近年その發行回数も頗る減少し、その成長の甚だ心元なさを感じられ、本誌を通して鮭鱒孵化事業の發展充實といふ點も、果してどうであらふかとの杞憂も無きにしもあらずであつたが、有力なる協力組合の出現によりて全道五十餘の孵化場はその生氣を挽回し、拓殖の進歩と本事業とは逆行する運命にある如く思惟せらるゝ現状を突破

して、眞に鮭鱒國本道の爲に貢獻せられん事を切望すると共に、本事業に参加する技術者各位の常に不斷の研究の反影、又相互連絡の使命ともいふべき本誌のいやが上にも發展せんことを祈つて歇まない次第である。

鮭鱒保護協會の解散に際して

農學博士 田 中 林 藏

鮭鱒彙報と鮭鱒保護協會何といふ親しみのある名稱であらふか。時々刊行される本誌が讀んでも讀まなくとも、鮭鱒孵化事業に幾分でも關係のある私共にとつては親しみ深い雑誌であつたし、本誌と不離の關係にあつた保護協會もそれだけ親しみのある名稱であつた。年々開催されて來た鮭鱒保護協會總會といふのが本道各地で開催される時は何時も欠かさず出席したものであつた。此會合に顔出しすることは鮭鱒孵化事業に關係ある色々な方々にも會へるばかりでなく、其れ等の方々の御説を一から十まで拜聴するやうな氣分で何時も満悦感に打たれるのであつた。其うち變つた名稱で之れに代るものが産ると否とは問題でない、なつかしい保護協會の名稱が解散と共に永久に失はるることそれだけで感深きものがあるし、其れを記念するための解散記念號の刊行。それからまた其記念號に載せる感想文を今茲で執筆してゐるなど、あれもこれも思へばまた感慨無量である。

孵化の恵み

齋 藤 珠 川

全道の河に海に鮭鱒の回游するこの幸は全く本道の誇りにて先覺者の人工孵化に盡された功績は今更ながら感謝感激の至りである。

これに協力せし保護協會が時代の推移と時局の要請に應へんとして發展的解散式を閑古鳥なく釧路公會堂に擧げて保護協力組合の文化部門は其推進力を押し込む事になつたことは誠にその意義の深きものを感じる次第である。協會の解散が遂げられても其功績は鮭鱒の回游する限り永久にその歴史に輝を残すことであらう。

○ 訴 上 する 鮭 の 石 狩 月 百 里
稚 魚 群 る、 孵化 場 の 朝 や 露 涼 し

○ 枝 に 垂 れ て 鱒 ね ら い 居 る 蛇 の 舌
蛇 を 追 ふ 鱒 の 背 筋 や 淀 青 し

○ 溪 流 に 颯 爽 と や ま べ 秋、 澄 め る

釣人のやまへ提げ行く紅葉かな

病む友に寒鯉の生血すゝめけり

鯉の稚魚稻田に嬉々と育つ見ゆ

○

稚魚群れて養鱒場を飛ぶ螢
餌に跳る虹鱒に朴の花香る

擇捉島と孵化事業

擇捉島水産會長 齋藤榮三郎

北海道鮭鱒保護協會は本道孵化事業に多大の貢献を成され、又其の發行に係る鮭鱒彙報は各方面の權威によつて毎回學術上有益な種々の論文等を發表せられ、斯業の指導啓發に盡された事は甚大なるものでありました。

然るに協會は茲に解散を決議し、今回其の機關誌を以て解散記念號を刊行する事と成りたるに就て、何か感想でも述べる様にとの御勧めを受けました。誠に感慨に堪へぬ次第であります。就ては擇捉島の鮭鱒漁業者として最も關係の深い孵化事業の今昔に就て、先人苦心經營の事績を偲んで敬意を捧げ聊か責めを塞ぎ度いと存じます。

偕て本邦に於ける鮭鱒の孵化事業は相當往時に溯る事が出来するが何と云ふても明治二十一年に千歳孵化場が出来ましてから、其の影響によりまして本道南部方面に數箇所の孵化場が起りましたけれども、間もなく何れも閉鎖せられた様な状態でありました。何分當時は未だ此事業に對する認識が一般に徹底せぬ時代であつたに拘はらず、擇捉島に於ては早くも明治二十年第十代栖原角兵衛、高城重吉等の諸氏は深く之が必要を感じまして、技術傳習の爲め使用人や親戚の若者などを千歳孵化場に遣はし、又一方適地調査の爲め道廳に技術官の派遣を願ひ、其結果本道孵化事業の恩人藤村信吉氏の調査に基き、當路の地を下して孵化場の建設に着手し明治二十三年十月から開設し孵化を始めました。又明治二十六年には水嶺隣多氏が東浦イラミザルの地に紅鱒人工孵化場を創始しましたが、同所の漁業を中止と共に廢せられました。明治二十八年五月には漁業組合に依つて紗那別飛の兩所に孵化揚竣功し、當路孵化場で養成せられた傳習生等も技術に習熟したのでありましたが、同年の不漁と翌年の組合役員更迭の爲め方針が變り遂に事業中止と云ふ事になり、高城惣吉氏等は深く之を遺憾とし亡父重吉氏の遺志を繼いで獨力でも經營しやうとしたが、紗那の建物などは遂に賣却破壊せられたなどと云ふ事もありました。孵化事業漸次認識せられる様になると同時に蕃殖保護の問題は自然有識者間に論議せられる様になり、漁業組合は明治三十三年十一月始めて内保留別紗那別飛藥取の諸川へ監守人を配置し、翌年より漸次他の諸川にも及ぼしました。又川網全廢問題等も盛に擡頭する様な譯で幾多迂餘曲折の結果明治三十三年より向ふ七ヶ年間休業と決した様な次第でしたが、後に大正十一年に至り全部之を抛棄して専ら天然蕃殖に努める事になりました。

明治四十四年には擇捉島水産組合は留別川上流に、大正四年には谷茂平氏はウルモベツに紅鱒人工孵化場を新設して、漸く本島孵化事業發展の機運に向ひました。越えて大正十二年栖原氏に依つて老門に、大正十三年には留別孵化場が北海道廳に移管せられると同時に有萌に孵化場が設けられ、昭和三年には擇捉島水産會は別飛に、同四年

には栖原氏に依り比良系に、同七年には羅臼養殖組合に依り羅臼に、同九年には單冠養殖組合に依り年蒔にと云ふ風に續々と孵化場が設けられ、當路の如きは本年其の五十周年を記念した様な次第であります。

今や全道に於て鮭三億萬粒、鱒一億二千萬粒の内撰捉全島では、鮭八千五百萬粒、鱒五千百萬粒の孵化設備を擁し、鮭は二十八パーセント、鱒は四十二パーセントを占むる様な盛況を呈するに至つたのであります。昭和九年四月民營孵化場の大部分國營に移管せられました。此間幾多の苦心經營が盛られて居るのであります。現時國家總力戰下に於ける食糧問題の解決は最も痛切に吾人の双肩に懸つて居るものと思はれるので、蕃殖保護と云ふ事に就ては益々慎重なる考慮を拂ふべきであると信ずる次第であります。

鮭鱒彙報の思ひ出

菊 地 覺 助

北海道鮭鱒孵化事業協會が設立せられ、その機關誌として「鮭鱒彙報」が孤々の聲をあげたのは昭和四年五月であつたが、爾來今日迄十數年、時に消長はあつたとしても繼續して來たことに敬意を表するものである。自分達も鮭鱒孵化事業に職を奉じた時代には多少共本誌に關係を持ち、その發達を念願としたが、兎も角も本誌は本邦に於ける鮭鱒に關する唯一の専門雜誌と稱してもよい立場に在りて、斯界に貢獻したことも事實であつた。自分は在職中各地の孵化場を巡視した時に、若い技術者達は何づれも山間不便の土地に居る關係上、文化に遠ざかつてゐるの

で新聞雜誌は唯一の慰安であり、殊に専門とする鮭鱒孵化事業に關する智識の吸収には、當時一年僅かに數回發行の此の「鮭鱒彙報」も實に沙漠の中のアシスとして、その發行を鶴首して待たれて居るといふことを異口同音に聞かされて實に同情を禁じ得なかつたと同時に、此の人々を満足せしむべき雜誌たらしむることも技術者の責任と思つて、本誌の健全なる發達を希ふの念切なるものがあつた。而して専門雜誌である以上之れが記事については編輯者の苦心の存するところで、本誌初刊號に當時の水産課長も「——唯特に注意を促がしておくことは其の内容は餘りに學究明ならず、又餘りに俗受けに汲々たらずよく本會の目的を達するに必要な中庸の道を確乎たる足どりで進んで欲しい」と述べて居るやうに、所謂その中庸を行く事はなか／＼容易でないばかりでなく、第一いづともなやまされるは其の原稿難である。本誌も恐らくその點に於て苦心されたであらう事は吾等の多少の經驗からも言ひ得る事である。世に雜誌數の發行はその永續性に何時も疑問符を附される事が常である。所謂三號雜誌で終るものも尠くない。甚だしきは堂々その抱負使命を述べて華々しく發行される専門雜誌數であつても創刊號で終り、正に開店休業の觀あることも決して新しいことではない。之れは單に金の問題ばかりでなく、實にその記事の内容と原稿難から來る場合が多いので、本誌は兎も角も絶えんとする命脈を此處迄引つ張つて來られた事ばかりでも並々ならぬ苦勞であつた事と想像せられるが、今や本誌は本號を以て終刊とされると聞いては誠に感慨無量である。

翻つて本道の鮭鱒孵化事業の現在を考ふるに、世界的孵化場と稱された千歲孵化場を始めとして、創立の古い孵化場はその設備の荒廢振りは特段と目立つて來て居る事實に直面し、經費支出の困難と、資材意の如くならぬ事を物語るものと思ふが、洵に遺憾の次第であるけれども、此の時局に際會したのは寧ろ孵化事業者に與へられた試練の時でも申さねばならぬ。從來より孵化事業に金が掛り過ぎると言はれて居り、又事實その通りであるがこれを如何に簡易化せしめ、而して能率をあげ得るかについては技術者として常に研究せねばならぬ事勿論であつて、特

に今回は痛切に感じさせらるゝのである。人が足らぬ、物資が意の如くならぬ、之れらを孵化事業者が研究の好題目であつて、殊に若い技術者達は從來の方法を經とし、自己の研究を緯とし一段の努力を傾注すべき秋と思ふ。既往に於て些か退嬰的であつた本誌も、今こそ猛然立つて本來の使命に突進せねばならぬ時である。本誌の誕生は非常に祝福せられ、當局亦指導後援を惜しまぬ事を言明された。而して「本誌は會員のものである、將來發展するも又不振になるのも要は會員各自の責任に歸する事を自覺し」云々と喝破されたことを思ひ合せて感更に深きものがある。

鮭鱒孵化事業は現在の組織よりすれば北海道水産孵化場の一部門ではあるが、しかも其の事業は同孵化場の大部分を成すものであり、五十餘年の輝かしき歴史に對して益々光輝あらしめなければならぬと思ふ。

鮭鱒の將來はその孵化事業の充實によつて必ずしも悲觀すべきものと思はないが、時恰かも重大時局に際會せりとはいひ、前記の如く事業の簡易化によりて禍を轉じて福となすことに精進せられんことを望んで歎まぬものである。しかも本誌は之等の研究發表機關として大に使命を果さねばならぬ時、廢刊の運命に相遇せる事を遺憾としたが、聞けば北海道鮭鱒保護協力組合が其の文化部に於て大いに陣容を新たに於て鮭鱒彙報の身代りとして雑誌が刊行せらるゝ計畫との事である。文化部の事業の内容は吾等の未知に屬するものであるが、之れは正に發展の解消と謂ふべきで洵に慶賀に堪えざると共に、今後の發展を至囑する次第である。

最後に本誌に關聯を持つ吾等の願ひを申述べ度い。自分は曩に鮭鱒孵化事業發祥の地として、札幌市階樂園の一角に記念碑建設の事を提唱して、幸ひ本會の容るゝところとなり本誌にも發表された事であるが、會としては金もないし別途の方法によるの外なかつたのであるが、その目鼻さへもつかぬ内に本會の解散となつて誕生の機會を逸した譯であるが、鮭鱒孵化事業に多大の關係ある鮭鱒保護協力組合が、側面より物質的に多大の協力をして居られ

るのであるが、此の際鮭鱒孵化事業の歴史を尊重する意味からも同組合が記念碑建設の一役を買つて貰へぬものであらうか、之れは文化部の事業としては正に相應はしい事と思はれるのである。元より同處は區域も甚だ狹隘であり到底大規模の建設を望まれないし、自分の目算では精々貳千圓位で完成せしむる事が出来ると思はれる（一昨年頃見積らせた時は千二、三百圓程度であつた）孵化事業協會の解散と共に、此の問題の關係を斷たれるのを遺憾に思はれる餘り、再び之れを提唱して鮭鱒保護協力組合の協力を切望して敬まぬ次第である。

北海道鮭鱒保護協會を顧みて

谷 口 達 三

十月五日附にて北海道鮭鱒保護協會長より自分如き單なる本協一會員に過ぎざる者に迄「前略 本會ハ去ル六月中旬開催ノ總會ニ於テ解散致スコトニ決定……中略……本會ト特ニ關係古キ貴下ニ於カレテハ亦感慨深キモノ有之事ト存ジ候間右御追想ノ玉稿ヲ賜リ……後略」云々のいとも身に餘る御鄭重なる御依頼狀に接したので、感激の餘り當時を追憶して拙文を綴る次第である。

自分の回顧は主に現在の協會の前身昭和二年六月誕生や、北海道鮭鱒孵化事業協會でなく昭和九年四月北海道廳が民營孵化場の内主要孵化場を移管統一し北海道鮭鱒孵化場を設くるに及び前記孵化事業協會を一應解散、新に昭和九年十一月組織された現在の北海道鮭鱒保護協會であるが自分は此の改組後の協會誕生と共に孵化場に職を奉じ

居た關係上本會事務委員を委嘱され庶務、會計の重責を昭和十四年四月現在の膽振支廳に轉動する迄滿五ヶ年、微力菲才乍ら當時の半田理事長の御指導下に御務めした譯で、自分の孵化場在勤滿五ヶ年の想出は同時に本協會の想出ともなるのである。

で自分の孵化場時代の仕事の大半は本協會と密接の關聯ありたるものと記憶して居り、他面新設孵化場の發展は本協會の發展と並行して來たかの如く信じて居る。

今年限りにて本協會も解散すると承り一抹の寂寥感すると共に其の間を懷古すれば眞に感慨無量のものあり、二、三の想出を辿りせめての慰とも致し度い。

自分の本協會（前身）に會員として加入せしは昭和八年四月十五日滿三ヶ年の昆布技術員（駒ヶ岳噴火災害に依る昆布礁復舊擔當技術員として尾札部漁業組合に奉職）より日高水産會經營の染退鮭人工孵化場の技術員として轉勤し赴任挨拶の爲水産課へ參廳の砌現在孵化場の元老内海氏の獎めに従ひ新會員として加入するに始まり今日迄十ヶ年、會員としてはさして古くもなく新しくも無く中位處と申すべきか。

現在の協會誕生と同時に委嘱された事務委員は岡田、升田、内海、奥村、菊地、山本の六氏と自分であつたが、自分が孵化場より離れる迄滿五ヶ年間、岡田、升田、内海の三氏とは互に協力本會の發展に微力を致した積りだが自分は庶務、會計を擔當せし關係上、前身孵化事業協會の赤字會計を引繼ぎ當初遺繰算段に苦勞し會費滯納者に對し失禮を顧みず「押しの一手」で火の車の無理押の働きを此の際御諒察を願ひ、御詫を申上げる機會の得た事を喜ぶ次第である。夫につけても岡田雋君は流石に名編輯長であられたことを思ふ。本協會に改組されてからの鮭鱒繁殖

報を御覽になれば解る事ではあるが御多忙中一手に引受けられ年三、四回の發行を缺かさなかつた。「君の方（會計）が差支へなければ隔月に發行したい」と意氣込まれ自分に相談はあつたが財政は許さず御希望に對して涙を振つて御許しを願つた様に記憶して居る。全く岡田君の熱ある編輯に副はなかつた點申譯なく思つて居る。

内海氏は孵化事業遂行上關係者の連絡、融和に總會の機會毎大活躍されし點感謝の外はない。

本協會は機關誌「鮭鱒繁殖報」や「鮭鱒孵化事業」繪葉書其他印刷物を發行し絶へず斯業の宣傳啓發に資したが其の蔭に故人となられた山本勝見氏の努力も忘れてはなるまい。

北海道鮭鱒孵化場の千歳より札幌郊外中ノ島へ移廳に伴ふ移廳式（昭和十二年七月十日）の盛況を想出す毎に亦現在の孵化場を訪れ構内に歩を運ぶ度毎に建設當時の荒涼たる荒地を想起し、本協會蔭の協力が想ひ出されてならぬ。

他面邊僻の地に甘んじ資源維持に努むる孵化事業従事者の表彰に亦惠まれざる之等會員の試験、研究、調査等に補助、助成し向學心を鼓舞せる等其の足跡を忘却するを得まい。

本道鮭鱒漁業の恒久的發達と其の資源維持増進の基根となるべき鮭鱒孵化事業の擴充強化を圖る爲北海道鮭鱒孵化場の本、支場、事業場の全般に亘りて援助協力を爲すを目的となす爲に昭和十三年十一月創立せられた現在の北海道鮭鱒協力組合の前身北海道鮭鱒保護組合の設立に際し其の産婆役を努めし本協會知る人ぞ知るである。

最後に自分の事務委員中會長は小池、稻垣の二代、理事長は現半田會長の指揮を受け大過なく責務を果し自分の

學友であり畏友なる片山兄に事務一切を引継ぎ元の一會員に還り本協會の發展を祈り來たりしも本年を以て發展的解散をなさんとするの報に接し轉た感慨無量なるものあり。

×

×

今や北海道鮭鱒孵化場は昭和十六年四月地方費移管と共に北海道水産孵化場と改稱され、捕獲事業から一貫した名實備はつた孵化事業を經營する事となり、併せて鯉の孵化事業と共に淡水魚類の増殖事業をも行ふこととなり孵化場の擴充誠に慶賀に堪へない次第であるが、此の陣容完成に協力、支援を惜しまなかつた本協會、貳百四拾餘名の會員ありし事を本協會の解散目録に控へ一言附記として回顧とす。

十勝川の流水

水 澤 生

十勝の鼻曲りで歴史の古い十勝秋味も大正の中頃から段々と市場から影が薄くなり、沿岸漁業家も資金調達に苦勞をする様な状態となつたので、此のまゝ放任すべきでないと原因を調べたところ、十勝川の流れだと氣がついたが明治二十八年以來先人が苦心經營して來た國家的事業である孵化場の經營がピンと心を打たないので、大正二十三年頃から種々な方面から研究して見た結果、此のまゝでは駄目だと改革を窃かに決意し、直接十勝川沿岸の捕獲場は勿論上流は佐幌川から下流途別川と星の出を待つて川風にさらされ、夜明けの鳥と共に里へ歸り、時には密漁

と間違はれたり、密漁者を捕えて語つたり、具さに實情調査に努めた。

當時の經營者十勝外四郡水産組合は其の經營の根本から間違つて居たのだ、親魚捕獲場を海岸鮭鱒建網の漁業權の如く心得て入札により捕獲人と賃貸借し、落札者は營利を主とする爲卵は鹽漬、親魚は頭をボン／＼と擲られて即死、甚しき者は分場と稱して巨額の權利金を取つて密漁團に捕獲場を亂設させ、亂獲の状態見るに忍びない慘状なので余は若輩であるが、今だと決意し單身道廳へ乗込んだ。

幸ひ水産課に當時十勝を知る廣木仙太郎君が居つたので、十勝の現状を泣訴した。同氏も共鳴して呉れ時の養殖主任半田技師、杉本主事、野田係官と數回に亘り會談陳情した。水産組合の解體だ、根本より捕獲採卵の方法立直しだと力説したのを課長小石孝一氏の知る所となつて、水産組合の主腦者三名は參廳を命ぜられ即刻組合を解體して鮭鱒漁業者のみの養殖水産組合を創立せよと嚴命された。

余は吾が事成れり、俺も一員としてやるぞと喜んだのは昭和二年であつた。茲に大津村一帯の鮭鱒漁業者を網羅した十勝外四郡鮭鱒養殖水産組合が生ぶ聲を高く擧げ、初代組合長に堺千代吉氏、副組合長本庄豊吉氏、評議員に齋藤兵太郎氏を始め酒井直市、鹽谷平治兩氏と余の四名でスタートを初つたが、堺組合長が在任數ヶ月にして病氣で退き、大村藤五郎君が策動して二氏組合長となつた。然るにオベリベリ孵化室改築工事補助金下付の爲野田技手が工事検査に來場され驚いて歸廳した。それは組合長一個の考で工事を施行した爲間違があつて補助取消と言つた様な問題が起き、余の知つた時は相當時が過ぎて居たが單身參廳して小石課長に組合の經濟關係や事業内容を申上げ補助金下付を懇願した處、紫煙と良い香りのする葉巻を横に銜え新聞の横からジロリ／＼と見て曰く、間違なのか故意にやつたのか俺は報告を見た文だけで判る。改組した組合が勿々こんな官廳を無視する様な不届な行爲をするのでは補助金はやれない、お前に理窟があるなら言つて見よ聞いてやると、一本痛い所をやられた。此れは駄目だ

挺子でも起きないぞと考え、残念乍ら一言半句もなく涙を吞んで答えた。首を取替えて改めて参りますと言つて歸つた。廊内の方々が俺を見て笑つて居つた時は目頭が熱くなつた。早速齋藤兵太郎氏に相談して評議員會を招集する様組合長に申込み、評議員會に引續き總會を開催し、此のまゝ放任すれば組合は解散を命ぜられる、補助金丈けの問題でない、十勝川の流れに火なる禍根を將來残すのは甚だ残念であるから、組合長に辭任して呉れと突込んだ處、大村氏は一期丈けなんとかやらせて呉れと衷訴して來たが斷乎として詰腹を切つて貰つたが俺も苦しかった。三代組合長として齋藤兵太郎氏を選任した時は事業の最只中一ヶ年の内に三人も組合長が代るやうな始末なので仕事は軌道に乗らずへト／＼で年は暮れた。明くる正月齋藤組合長と共に酒井君を同伴して参廳し、小石課長に御約束通り組合長の首を取替えて参りました。孵化事業に對しては自分等が現場に出て責任を以て専心働きます。悪い處は即刻改めるから、組合の財政上又運営の上に大なる支障を來すから工事補助金を下付願ひ度いと陳情したら、課長又曰く「十勝は全道一の惡質組合だ、先年採卵補助金の四百圓を取消した實例もある。改組した組合が又此の状態であるから官としても相當考慮をして居るのである。然し君等が此の小石を騙して三千八百圓を取る爲でなく眞劍にやるなら出さうが君等は同穴の狸だからな」、暴言を吐く男だと思つたが、昔日の失敗もあるので、向張り俺もグツト來るのを怯えて靜かに答えた。吾々は誓言する。十年後の十勝は首にかけても全道一不東洋一の孵化場にして御見せ申しますから、此の場合組合の財政運営及對外的な關係等總ての立場をあらゆる角度から見て寛大な御處置と同情を以て御下付願ひ度いと懇願する事で二、三日を費した。側面から半田技師、杉本主事の御配慮も願つて四ヶ月間課長の机の中で動きの取れなかつた書類が浮び上つた。

人的にも物的にも惡條件の十勝川を一日も早く克服して課長に見參せんと努力し、昭和四年に五百万粒の採卵成績で孵化室から卵が溢れた。やればやれるものだと思つて居つた矢先一月中旬頃から稚魚がボツ／＼死體となつて

來た。場員鴨川豊君も心配して相談に來たので、早速道廳又は水産試験場へ水を送り水質検査を願ひ、現況調査に日を費して居る内に日々死體が増加する一方なので對策を道廳と打合せをして居る間に五百万粒の稚魚は一尾も残らず斃死の慘狀となつた。吾々に科せられた大難が折角孵化室や事務所を改築してやれ／＼と思ふ途端に此の悲況だ。徹底的に原因を探究すべく水産試験場の高安技師の派遣を願ふこと十數回、帯廣市の地下水を全市に亘りボーリングして調べたところ北海道製糖會社の製糖發液が地下に浸透して孵化水に混入する爲と判明した。組合の改組問題、孵化室事務所の改築整備等成りやれ／＼と思つた一年目にこんな状態になつた。然し組合員は丸となつて對外的にも内部的にも立ち上つて孵化場を移轉する事になり、適地調査の爲鴨川君と共に佐幌川上流を始めとして芽室川だ、美生川だ、ヌツブク川だと草鞋履きで踏査すること數ヶ月、大正村のヌツブク川を最適地と認め道廳へ調査を依頼し齋藤光雄技師が調査に來勝された。背丈けもある熊笹の茂る荒野を細雨肌を刺す冷氣にもめげず腰迄も濡れ乍ら上流からトランシットを持て川の中をさぶ／＼と調査すること三日目腰掛茶屋で大正村の堂前區長さんと三人で呑んだ熱燗の酒の味は今でも思出の極、殊に嬉しかつたのは此處なら適地だ、早速工事に取掛る様にと言はれた時は又酒の味は格別であつた。

バラック建の孵化室、五百万粒收容の設備、鴨川技師は二間に三間の差掛小屋で冬期辛棒して専心孵化作業に精進して呉れた事を思ふと涙ぐましい時代であつた。打續く災厄で昭和五年頃には組合の財政極度に行詰り、三万圓近くの負債となり齋藤組合長も悲想な顔をして居つた。吾々組合員は此れが對策として陳情に陳情を重ねて居た大曲旅來の捕獲場を許可せられる様道廳へ願つたが、時の荒井水産課長は首を横に振つて駄目だつたのに半田技師の英斷で許可となつた時の氣持は今でも忘れられない。昭和九年孵化場の技術方面が道廳直營として移管されて費用も減じたので財政も樂になつて來た時、千代田の堰堤工事が完成したので捕獲場を設備し全力を盡して捕獲採卵

に努めた結果二千万粒から三千万粒と成績が向上し昭和十二、三年頃には四千万粒以上に達する好成績となつたので幕別村白人に第二孵化場を新設し五千万粒を目標に行進ラツバを吹き鳴らしつゝ進發した。

十數年前の全道一の悪質組合が今は孵化事業に協力する事十數万圓、設備の完備と捕獲採卵成績十勝川のみで五千万粒以上、一河川で五千万粒以上を採卵孵化して居るのは全國に無く斯くて全國一否東洋一の豫言も達成した今日魚族繁殖に寄與し得た吾々組合員の満足は勿論であるが、半田水産課長と野田孵化場長の激勵の賜と深く感謝して十勝川の流れの一文を擲筆する。亂文失禮。

北海道鮭鱒保護協會年表

本協會の前身北海道鮭鱒孵化事業研究會の創立より協會解散に至る迄十九年間の主なる施行事項に就き年別に抄録す。

大正十三年

- 北海道鮭鱒孵化事業研究會創立の趣意書を全道關係者に發送し賛成を求め組織す。(九月八日)
- 本會事務所を北海道水産試験場(高嶋)に置く。會員數三十二名。(同月 同日)
- 北海道鮭鱒孵化事業研究會々報第一號を發行す。(十一月二十日)

大正十四年

- 會報第二號を發行す。(一月二十日)
- 千歲孵化場長藤井顯氏在職二十五年祝賀表彰の企に賛し本會に於て斡旋す。(同月 同日)
- 會報第三號を發行す。(三月二十日)
- 會報第四號を發行す。(四月三十日)
- 會員數約八十名(正會員二〇名、賛助會員六十余名)

昭和三年

- 北海道鮭鱒孵化事業協會を設立し會長に内藤産業部長、理事長に小石水産課長就任す。會員數一六四名(二種會員三十六名、二種會員一三三名)。(六月)

昭和四年

- 本會機關誌鮭鱒彙報第一卷第一號を發行す。(五月一日)
- 本會第一回總會を開く。出席者五十九名。(六月十四日)
- 彙報第一卷第二號を發行す。(七月一日)
- 彙報第一卷第三號を發行す。(九月一日)
- 本會事業たる鮭發生標本の作製配付、養鱒試験、機關誌及有益なる印刷物の刊行に對し北海道地方費より補助金四百九十六圓の交付を受く。
- 千歳孵化場の豊平川親魚捕獲試験を本會に委託せらる。
- 臨時出版物としてヤマベの話(半田芳男著)、孵化事業要覽等を發行す。

昭和五年

- 彙報第二卷第一號を發行す。(一月一日)
- 同 第二號を發行す。(三月一日)
- 本會々員數三月三十一日現在百六十六名(一種會員三二名、二種會員一三四名)
- 本會より河川水質汚漬防止の爲適當なる法令の制定に關し農林大臣に陳情す。(四月一日)
- 彙報第二卷第三號を發行す。(五月一日)
- 第二回總會を開く。出席者五十名。(六月一日)
- 彙報第四號を發行す。(七月一日)
- 本會事業に對し北海道地方費より補助金三百圓の交付を受く。(十月二日)

昭和六年

- 彙報第五、第六合併號を發行す。(十一月一日)
- 十二月一日現在會員數一六八名(一種三四名、二種一三四名)
- 彙報第三卷第一號を發行す。(一月一日)
- 同 第二號を發行す。(三月一日)
- 小石理事長退官の爲辭任せらる。(三月)
- 三月三十一日現在會員數一六七名(一種會員三四名、二種會員一三三名)
- 彙報第三卷第三號を發行す。(五月一日)
- 第三回總會を開く。出席者五十六名。
- 今回は特に水産局徳久農林技師臨席せらる。(七月二十五日)
- 本會理事長に新井水産課長就任せらる。(同月 同日)
- 彙報第三卷第四號を發行す。(八月一日)
- 同 第五號を發行す。(十月一日)

昭和七年

- 同 第四卷第一號を發行す。(一月十五日)
- 同 第二號を發行す。(三月二十五日)
- 第四回總會を開く。出席者五十三名。(六月二十五日)
- 民營孵化事業の經營法の改善並に本道孵化事業方針の具體的研究と其の實行に關する調査委員を舉ぐる事とな

り民間側より小池仁郎外十三名、官廳側より半田技師外五名を挙げ。本調査の結果は後年の孵化事業統制の基礎となるものなり。(同月 同日)

○本年度より總會出席者の希望者を以て實地見學を爲す事となり千歳孵化場を視察せり。(同月 同日)

○彙報第四卷第三號を發行す。(七月二十五日)

○從來本會にて製作配付せる鮭發生標本を全道小學校へ無償配布して兒童に稚魚愛護の觀念を鼓吹する事となり全道一〇八校へ配付せり。

○本道孵化事業に多年貢獻せる菊地覺助氏の官界勇退を記念する爲に、本會發起となりて斡旋し記念品を贈呈せり。

○彙報第四卷第四號を發行す。(九月三十日)

○孵化事業調査委員會を開く。其の結果委員の決議を以て孵化事業の國費經營其の他の事項を道廳に要望陳情せり。(十月七日)

○鮭鱒人工蕃殖論(半田芳男著)を本會に於て發行す。(十一月四日)

昭和八年

○彙報第五卷第一號を發行す。(一月三十日)

○同 第二號を發行す。(三月三十一日)

○札幌釣魚聯盟主催の釣の趣味展覽會に本會より鯉卵人工孵化の實況、其の他の參考品を出品す。(五月二十日)

○本會より北大水産専門等越智助教授に委嘱研究中の鮭皮鞣製法の研究發表あり。(同月 同日)

○彙報第五卷第三號を發行す。(五月三十一日)

○鮭放流稚魚の回歸漁獲高表を印刷配付す。

○第五回總會を開く。出席者六十三名。(六月十七日)

○彙報第五卷第四號を發行す。(七月三十一日)

○小池仁郎氏外五名は民營孵化事業を代表し北千島流網漁業の勃興の結果沿岸定置漁業經營に及ぼす影響を憂慮し孵化事業の窮境打開の爲右流網漁業の一部を孵化事業經營者に許可せられ度き旨を長官に陳情す。

(十一月一日)

昭和九年

○彙報第六卷第一號を發行す。(一月一日)

○鮭鱒孵化事業統制實施準備協議會を道廳主催にて開催し長官の訓示、半田技師の統制要綱の説明ありて後協議し實施する事に決定せり。(二月二十日)

○民營孵化場三十八ヶ所移管せられ在來三官營孵化場と併せて北海道鮭鱒孵化場設置せらる。(四月一日)

○彙報第六卷第二號を發行す。(四月三十日)

○同 第三號を發行す。(七月三十日)

○十一月一日現在會員數一九〇名(一種會員四一名、二種會員一四九名)

○第六回總會を開き本會を解散して更に北海道鮭鱒保護協會を創立す。出席者四〇名。

會長に小池仁郎氏、理事長に半田芳男氏就任す。(十二月二十六日)

昭和十年

○本會の決議により農林大臣に鮭鱒の沖取と沿岸漁業と相容れざる事情を述べ適當なる措置を採られ度き旨を陳

情す。尙本件に關しては小池、大西、村山、八木澤の諸役員上京して活躍せり。(一月十日)

○彙報第七年第二十六號を發行す。本號より彙報を年別に初判より逐號する事に變更せり。(二月二十二日)

○七月十五日現在會員數一九五名(一種二六名、二種六九名)

○第七回總會を開く。出席者四二名。(七月十八日)

○本會に顧問を置く事に決す。新井水産課長、倉上水試場長、佐々岡館高水校長、飛島樽水校長、徳久農林省技師、藤田理學博士を推す。(同月 同日)

昭和十一年

○一月一日現在會員數一九七名(一種二七名、二種一七〇名)

○小池會長東京に於て逝去せらる。(一月二十四日)

○彙報第八年第二十八號を發行す。(一月三十日)

○三月三十一日現在會員數一九五名(一種八〇名、二種一一五名)

○彙報第八年第二十九號を發行す。(四月二十日)

○第八回總會を開く。出席者五〇名 吉野養鱒場、支笏湖及北海道鮭鱒孵化場を見學せり。(六月二十八日)

○彙報第八年第三十號を發行す。(九月三十日)

昭和十二年

○彙報第九年第三十一號を發行す。(二月五日)

○三月三十一日現在會員數二一五名(一種八五名、二種一三〇名)

○彙報第十年第三十二號を發行す。(五月三十一日)

○北海道鮭鱒孵化場本場は從來千歳に在りたるが前年中に札幌市郊外中ノ島に新築し之に移轉したるにより右移

廳式を舉行せらる。本會よりは祝辭を呈し且豊平町と共催にて祝賀會を開催せり。尙本會より記念として孵化場に造園及温室設置費を寄附せり。(七月十日)

○第九回總會を開く。出席者百名。(同月 同日)

○本會々則を改正し副會長二名を置く事とし、齋藤主計、大西眞平の兩氏就任せり。(同月 同日)

○總會に引續き民間孵化事業従事者の表彰式を舉行し小野政秋氏外二十八氏に記念品を贈呈せり。(同月 同日)

○彙報第九年第三十三號を發行す。(九月十五日)

○孵化事業の調査研究及普及宣傳を爲し稚魚保護を圖る事業に對し本會より補助金として根室養殖水産組合に五十圓、釧路國水産會に三十圓を交付せり。(同月 同日)

○彙報第九年第三十四號を發行す。(十一月三十日)

昭和十三年

○彙報第十年第三十五號を發行す。(三月十三日)

○三月三十一日現在會員數二五七名(一種九九名、二種一五八名)

○彙報第十年第三十五號を發行す。(三月三十一日)

○第十回總會を府雲峽に於て開く。出席者四十七名。(七月九日)

○彙報第十年第三十六號を發行す。(七月十五日)

○本會理事長半田芳男氏北海道廳水産課長に榮轉せらる。(九月七日)

○彙報第十年第三十七號を發行す。(十月三十日)

○同 第三十八號を發行す。本誌を以て千歳孵化場創立五十周年記念號とす。(十月十五日)

北海道水産孵化場所藏淡水魚標本目録*

北海道水産孵化場 添 田 潤 助

鮭鱒及び鯉の孵化放流事業と共に淡水魚の増産、未利用内陸水面の利用開發を主體とした孵化場事業の傍ら本道産淡水魚の全的調査を行ひつつあるが、今取り敢へず本場内に所藏されて居る標本魚の目録を作つてみたが調査着手以來日淺くために不完全な所もあらうし又本目録より脱落せるものもなしとしない次第である。之等に就いては順に訂正追加をなして行く豫定であるから幸に御叱正を賜はらば幸甚である。本目録の配列は岡田、松原共著「日本産魚類検索」によつて配列した。

稿を草するに當り淡水魚調査に對して何時も多大なる便宜と並々ならぬ激勵とを惜しみなく與へられた本場長野田技師に對し心からなる謝意を表するものである。

本場標本魚を整理要約する時は

ヤツメウナギ科	2 種
テウザメ科	1 //
ニシン科	1 //
サケ科	13 //
アユ科	1 //
ワカサギ科	5 //
シラウヲ科	1 //
ナマヅ科	1 //
コヒ科	5 //
ドゾウ科	3 //

* 北海道水産孵化場業績ナリ

昭和十四年

○三月三十一日現在會員數二六七名（一種一〇二名、二種一六五名）

○第十一回總會を網走町に於て開く。出席者五十九名、網走湖を見學す。（六月五日）

○彙報第十年第三十九號を發行す。（十月一日）

昭和十五年

○三月三十一日現在會員數二七四名（一種一〇三名、二種一七一一名）

○彙報第十一年第四十號を發行す。（四月一日）

○第十二回總會を帯廣市に於て開く。出席者五十三名。千代田捕獲場、幸震孵化場を視察す。（六月二日）

○役員改選を爲し半田水産課長會長に就任す。稻垣前會長は鮭鱒保護組合長に就任せられ本會の顧問となる。

（同月 同日）

○彙報第十一年第四十一號を發行す。本誌を以て虹別支場創立五十周年記念號となす。（十一月十五日）

○改良簡易孵化方法の考案を懸賞募集す。（同月 同日）

昭和十六年

○三月三十一日現在會員數二七四名（一種九九名、二種一七五名）

○第十三回總會を函館市に於て開催す。出席者六十一名。洞爺湖を視察す。（五月十日）

○彙報第四十二號を發行す。本誌を以て當路孵化場創立五十周年記念號とす。（五月三十日）

○僻地の孵化場員の爲に醫療救急箱二十個を寄贈す。（五月三十日）

昭和十七年

○第十四回總會を釧路市に於て開く。出席者五十四名。弟子屈、摩周湖等を見學す。（六月十八日）

○民間孵化事業進展に寄與せられたる功勞者水澤一郎外十八名を表彰し記念品を贈呈す。（同月 同日）

（本會の解散を決議す。（同月 同日）

デウサメ科 Fam. Acipenseridae

5. デウサメ

Acipenser mikadoi Hilgendorf.

採集地 石狩川.

分 布 本州北部, 北海道, 朝鮮等に分布す.

ニシン科 Fam. Clupeidae

6. ニシン

Clupea pallasii Cuvier & Valenciennes

採集地 後志海岸, 厚岸 (人工孵化により孵化したるものを飼育せるもの)

分 布 北部日本, 北太平洋各海岸よりカリフォルニア迄で分布す.

サケ科 Fam. Salmonidae

7. ベニマス

Oncorhynchus nerka (Walbaum)

採集地 占守島別飛沼; 擇捉島羅臼沼.

分 布 千島, カムサツカ, アラスカ等に廣く分布する.

8. ヒメマス (ベニマスの陸封型)

Oncorhynchus nerka (Walbaum)

採集地 支笏湖, 倶多楽湖.

分 布 北海道本土に於ては始め阿寒湖, チミケツブ湖にカバチエツボ (アイヌ名) として知られ, 明治27年より3ヶ年間に北海道廳に於て支笏湖に其の卵を移殖したる所其の繁殖良好にして遂に本邦湖沼カバチエツボ種卵の供給池となるに至れり. こゝに於て北海道廳は「ヒメマス」と改稱することに決定せり (明治42年) 以來田澤湖, 十和田湖, 木崎湖等に移殖され現在繁殖を極めてゐる.

ウナギ科

1 //

トゲウヲ科

2 //

ボラ科

1 //

カジカ科

1 //

ハゼ科

4 //

カレイ科

1 //

以上の43種を認めらるるも本報文にはヤツメウナギ科の2種の幼生キンギョ, 及びベニマスの陸封型ヒメマスを加へて47を記録した.

ヤツメウナギ科 Fam. Petromyzontidae

1. スナヤツメ

Lampetra planeri (Bloch)

採集地 千歳川, 札幌 (豊平川, 及精進川), 野幌

分 布 日本海及太平洋に注ぐ河川湖沼溝等に廣く分布す.

2. スナヤツメの幼生

Ammocoetes of Lampetra planeri (Bloch)

採集地 千歳川

分 布 前者に同じ.

3. カハヤツメ

Lampetra japonica (Martens)

採集地 江別川, 千歳川, 石狩川 (花畔), 豊平川, 精進川, 常呂川, ウトナイト沼, 朱太川

分 布 島根縣及び茨城縣涸沼以北に分布す.

4. カハヤツメの幼生

Ammocoetes of Lampetra japonica (Martens)

採集地 千歳川及び其の附近の溝, 本場養魚池, 本場にて人工孵化によりて孵化せるもの.

分 布 前者の棲息を見る河川湖沼の泥の部分に埋潜し生活す.

摩周湖(元放流し其の後天然繁殖す), 虹別川(元逃げたるもの)
の天然繁殖せるもの)

分 布 北米カリフォルニアより明治10年に移殖されてより本邦各地に
養殖さる。

15. アラマス (Steelhead trout)

Salmo gairdneri (Richardson)

採集地 摩 周 湖

分 布 米國より移殖されたるものでアラスカに廣く分布す。

16. イ ト ウ

Hucho perryi (Brevoort)

採集地 國後島東沸川; 千歳川; 樺太紗那沼; 徳志別川。

分 布 北部日本に産し青森以北、北海道、樺太、千島に分布す。

17. オ シ ヨ ロ コ マ

Salvelinus malma (Walbaum)

採集地 占守島別飛沼; 樺太島振別川, 大山川, 羅臼沼, シベトロ川;
國後島東沸オリウスリ; 徳志別川, 斜里川, 千歳孵化場(樺太
島大山川産のものを移殖し, 池中飼育し採卵繁殖しつつあるも
の)

分 布 然別沼(陸封されたるもの); オコツク海岸, 千島, カムサツ
カ迄分布す。

18. イ ワ ナ

Salvelinus pluvius (Hilgendorf)

採集地 千歳孵化場; 國後東沸アンノロ川; 支笏湖。

分 布 東北地方日本海岸の山間の溪流より北海道、樺太、千島に及ぶ。

19. ア メ マ ス

Salvelinus leucomaenis (Pallas)

採集地 樺太島振別川, 羅臼沼; 千歳川, ウトナイト沼, 天鹽川; 占守
島別飛川; 國後島東沸アンノロ川。

9. カ ラ フ ト マ ス

Oncorhynchus gorbuscha (Walbaum)

採集地 湧別川, 敷生川, 浦河; 占守島別飛沼。

分 布 北海道, 朝鮮東海岸より以北, 沿海州, カムサツカ, 千島, ア
ラスカ等に多く, 北米の北部西海岸迄分布す。

10. サ ケ

Oncorhynchus keta (Walbaum)

採集地 千歳川, 網走川, 十勝川, 遊樂部川; 占守島別飛沼。

分 布 本州日本海岸能登半島, 太平洋岸は銚子を南限として, 朝鮮東
海岸, 沿海州, 北海道, 樺太, 千島, カムサツカ, アラスカ,
カナダ西海岸迄廣く分布す。

11. サ ク ラ マ ス

Oncorhynchus masou (Brevoort)

採集地 千歳川, 音根別川, 留別川, 祝津。

分 布 東北地方より以北, 北海道, 千島, 樺太, 沿海州に分布す。

12. ヤ マ ベ (サクラマスの陸封型)

Oncorhynchus masou (Brevoort)

採集地 國後東沸ボント沼; 千歳川, 十勝白人, 良留石川, 名寄川, 千
歳孵化場飼育にかかはるもの, 本場養魚池飼育のもの。

分 布 北海道, 東北地方の各河川の溪流に見られ, 臺灣中央山脈鞍部
附近迄分布す。

13. ギ ン マ ス

Oncorhynchus kisutch (Walbaum)

採集地 占守島別飛川。

分 布 千島, カムサツカ, アラスカより北米太平洋岸等北方に多産す。

14. ニ ジ マ ス

Salmo irideus (Gibbons)

採集地 千歳孵化場, 本場, 國後島二本城, 各飼育池に於ける飼育魚。

分 布 北日本、樺太等一般に分布す。

26. カラフトシシヤモ

Mallotus villosus (Müller)

採集地 石狩川。

分 布 北海道オコック岸、日本海岸より樺太に分布す。

シラウヲ科 Fam. Salangidae

27. シラウヲ

Salangichthys microdon Bleeker

採集地 石狩川々口、網走湖、遊樂部川。

分 布 東北地方、霞浦、東京灣、石川より北海道、樺太に迄分布す。

ナマヅ科 Fam. Siluridae

28. ナマヅ

Parasilurus asotus (Linné)

採集地 北見常呂川。

分 布 現今迄では北海道に分布なきものとされてゐたが、昭和11年6月常呂川に採集された。本州、四國、九州、朝鮮、臺灣、支那、滿洲等の河川湖沼に廣く分布す。

コヒ科 Fam. Cyprinidae

29. ウグヒ

Leuciscus hakonensis Günther

採集地 國後島東沸湖、千歳川、網走湖、名寄川、ウトナイト沼、幌別川、クンベツ川、目名川、石狩川、精進川。

分 布 南は九州より北は樺太迄で廣く分布す。

30. アブラハヤ (ヤチウグヒ)

Phoxinus phoxinus sachalinensis Berg.

採集地 天鹽川、北見市佐藤養鯉園養魚池。

分 布 本州信濃より以北、北海道、樺太、千島、カムサツカ等に分布す。

20. カハマス

Salvelinus fontinalis (Mitchill)

採集地 千歳孵化場、支笏湖、上川明石養鯉場。

分 布 米國東海岸より移殖され本邦北部各地に養殖さる。

アユ科 Fam. Plecoglossidae

21. アユ

Plecoglossus altivelis Temminck & Schlegel

採集地 千歳川、余市川、朱太川、豊平川。

分 布 本道石狩川以南の日本海岸、本州兩岸、朝鮮、臺灣迄で分布す

ワカサギ科 Fam. Osmeridae

22. キウリウヲ

Osmerus dentex Steindachner

採集地 國後島東沸川、新冠川、遊樂部川。

分 布 北海道、樺太、千島、アラスカ方面迄で分布する。

23. シシヤモ

Spirinchus lanceolatus (Hikita)

採集地 鶴川、大津川。

布 分 北海道太平洋岸に分布す。

24. ワカサギ

Hypomesus olidus (Pallas)

採集地 茨戸。

分 布 本邦各地の湖沼に産す。

25. チカ

Hypomesus japonicus (Brevoort)

採集地 國後島東沸川； 茨戸。

當別村中ノ小屋附近當別川には緋鮎を相當見らる (現在本場に於て飼育試験中)

36. エゾボトケ

Lefua nikkonis Jordan & Fowler

採集地 千歳川, 精進川.

分 布 北海道.

32. フクドデヨウ

Barbatula toni oreas (Jordan & Towler)

採集地 千歳川, ウトナイト沼, 精進川.

分 布 東北, 北海道, 樺太に分布す.

ウナギ科 Fam. Anguillidae

38. ウナギ

Anguilla japonica Temminck & Schlegel

採集地 ウトナイト沼, 塘路湖.

分 布 北海道, 本州, 九州, 朝鮮, 臺灣, 支那等亞細亞一般に産す.

トゲウヲ科 Fam. Gasterosteidae

39. イトヨ

Gasterosteus aculeatus aculeatus (Linné)

採集地 石狩川口, 常呂川.

分 布 北海道樺太より釜山及濱田, 利根川迄で分布す.

40. キタノトミヨ

Pungitius pungitius (Linné)

採集地 千歳川, 琴似村.

分 布 樺太, 千島, 北海道, 北部本州, 朝鮮に迄で分布す.

ボラ科 Fam. Mugilidae

41. メナダ

Liza haematocheila (Temminck & Schlegel)

分 布 北海道, 樺太に分布す.

31. フナ

Carassius auratus (Linné)

採集地 新冠川, 東瀬棚村冷水支流, 支笏湖 (移植繁殖せるもの), 石狩川, 大沼, 十勝川; 國後島東沸ポント沼.

分 布 樺太より臺灣に迄で分布し, 亞細亞, 歐洲に廣く分布す. 尙ほ十勝國幸震地方には緋鮎の産を見らる.

32. キンギヨ

(ワキン, リウキン, デメキン, キヤリコ)

Carassius auratus (Linné)

採集地 愛知縣彌富産.

分 布 北海道以南に廣く養殖さる.

33. コヒ

Cyprinus carpio (Linné)

採集地 網走湖, 十勝川, 札幌市浦島屋.

分 布 樺太鯉也湖 (移植せるもの) 北海道以南本邦に廣く養殖さる. 世界に廣く分布す.

34. 草魚 (サウユウ)

Ctenopharyngodon idellus (Cuvier & Valenciennes)

採集地 中華民國上海 (長野縣水産試験場へ移植し更に本場へ移植をなせるもの)

分 布 中華民國.

ドデヨウ科 Fam. Cobitidae

35. ドデヨウ

Misgurnus anguillicaudatus (Cantor)

採集地 千歳, 名寄川, 精進川, 篠路, 當別, 東瀬棚冷水支流.

分 布 北海道より四國, 九州, 朝鮮, 滿洲, 支那迄に廣く分布す.

(カハガレイ, メマガレイ)

Platichthys stellatus (Pallas)

採集地 擇捉島留別川; 國後島二本城川; 占守島別飛川; 網走湖, 石狩川.

分 布 北太平洋兩岸, 朝鮮, 東京以北日本.

参 考 文 献

- 1) Evermann, B. W. & Goldsborough, E. I. 1906 (明39) — The Fishes of Alaska, Bull. Bur. Fish., Vol. 26.
- 2) 波江元吉 (大2) — 白魚の屬種檢索, 動雜, 25卷, 300號.
- 3) 八田三郎 (明33) — 日本に於けるヤツメの種類及配布, 動雜, 12卷, 139號.
- 4) 正田豊次 (昭9) — 北日本産鰈類, 水産研究彙報, 4卷.
- 5) 藤田經信 (大15) — 移植によるワカサギの體格に及ぼす變異, 動雜, 38卷, 435號.
- 6) Jordan, D. S. 1905 (明38) — Notes on the Salmon and Trout of Japan, Annot. Zool. Jap., Tokyo, Vol. 5.
- 7) ———— 1925 (大14) — Fish., New, York.
- 8) Jordan, D. S., Tanaka, S. & Snyder, J. O. 1913 (大2) — A Catalogue of the Fishes of Japan., Jour. Coll. Sci. Tokyo Imp. Univ., Vol. 33.
- 9) Jordan, D. S. & Hulbs, C. I. 1925 (大14) — Record of Fishes obtained by David Starr Jordan in Japan, 1922, Mem. Carnegie Mus., Vol. 10.
- 10) 小林久雄 (昭11) — 日本淡水魚類並に其の寄生蟲, 東京.
- 11) 能島正一 (昭13) — ワカサギとチカとの差異に就て, 鮭鱒彙報, 36號.
- 12) 岡田彌一郎, 内田惠太郎, 松原喜代松 (昭10) — 日本魚類圖説, 東京.
- 13) 岡田彌一郎, 松原喜代松 (昭13) — 日本産魚類檢索, 東京.
- 14) 岡田 雋 (昭12) — 邦産ヤツメの變態後に於ける外部形態變化, 陸水學雜誌, 7卷, 1號.
- 15) ———— (昭13) — 北海道産ヤツメ2種の *Ammocoetes* に就て, 植動, 5卷, 5號.
- 16) 岡田雋, 川村輝良 (昭13) — 占守島の鮭鱒族, 植動, 6卷, 5號.
- 17) Sato, S. 1937 (昭12) — The Fauna of Akkeshi Bay VI. Pisces., Jour. Fac. Sci. Hokkaido. Imp. Univ., Series, VI, Zool., Vol. VI.
- 18) Tanaka, S. 1908 (明41) — Notes on a Collection of Fishes made by Prof. Iijima in Southern part of Sakhalin., Annot. Zool. Jap., Vol. 6.

採集地 石狩川, 天鹽川.

分 布 北海道以南本邦各地に産す.

カジカ科 Fam. Cottidae

42. カ ジ カ

Cottus Pollux Günther

採集地 厚田川, 千歳川, ウトナイト沼.

分 布 北海道及び本州の各地の河川に産す.

ハゼ科 Fam. Gobiidae

43. ヨ シ ノ ボ リ

Gobius similis (Gill) Jordan & Snyder

採集地 厚田川.

分 布 北海道から朝鮮, 滿洲, 臺灣, フィリピン迄で分布す.

44. ア シ シ ロ ハ ゼ

Acanthogobius lactipes (Hilgendorf)

採集地 石狩川.

分 布 北海道から朝鮮, 支那迄で分布す.

45. ウ キ ゴ リ

Chaenogobius annularia urotaenia (Hilgendorf)

採集地 石狩川, ウトナイト沼, 千歳川.

分 布 樺太から奄美大島, 朝鮮に及ぶ.

46. チ チ プ

Tridentiger obscurus obscurus (Temminck & Schlegel)

採集地 石狩川, 篠路, 千歳川.

分 布 北海道より琉球, 朝鮮迄で分布す.

カレイ科 Fam. Pleuronectidae

47. タ カ ノ ハ ガ レ イ

- 19) ———— 1911 (明 44) — Notes on Fresh-water Fishes from the Province of Shinano, Japan., Annot. Zool. Jap., Vol. 7.
- 20) ———— 1911 (明 44) — On Some Fishes from Lake Biwa, with Description of One New Species and a List of All the Fish Species hitherto known from that Locality., Annot. Zool. Jap., Vol. 7.
- 21) 脇谷洋次郎, 高橋仁助 (大 2) — 日本産シラウヲ, 動雜, 25卷, 301號.

稲田養鯉の手引

北海道養魚組合聯合會指導部編

は し が き

養魚は副業の一として何處でも行ひ易く又利益も多く其の方法宜ろしきを得れば之れによつて農家の生計大なる助けを爲すことは疑ひを容れない。魚類は獨り經濟的に利益あるのみならず自家の食料としても蛋白質、脂肪、石灰、ビタミンなど重要な營養分に富み、保健上にも大なる利益を與ふるものである。何處の農村にも溜池、水田用水路其他養魚に利用し得る水面が澤山あるが最も一般に實行し易き稲田養鯉について述べる。

一、稲田養鯉とは

稻を植付けた田に副業として鯉兒を放養した稻の收穫の外に鯉も收穫する方法である。稻と鯉とは利害が完全に一致して居る。即ち稻の生育に良い條件は、鯉の成長にも良い條件である。換言すれば鯉も良く育てたいと努力する事は稻を良く育成させる結果になり、稻の收穫を多くする爲力を盡す事は鯉の生産を増す事になる。この様に水があつて稻のよく出来る處であれば何れの稲田でも利用出来而も害虫の驅除、肥料の節約、除草勞力節減等の利點があるので廣くこの方法を紹介し、空閑水面から生産された魚を食糧とする事に依つて戦時下稍もすれば低下せんとする國民體位の保全に資せんとするものである。

一、如何なる稻田に養鯉し得るか

稻田養鯉を行ふ場所は稲の成長が良く飼育上安全なる場所であれば何れの稻田でも利用出来るのである。稻田養鯉に對する望ましい諸條件を列記すれば

一、日當り良好な所

一、田用水豊富で注排水に便利な所

一、降雨に際し浸水湛溢の害がなく旱魃に際し用水乾涸の虞れなき所

一、水持のよい田で水が暖る所

一、住宅地附近に在つて稻田が同一場所に集團と管理に便利な所であれば更に良い

尙潭水や湧水の様な冷水を直接引用する所は成績が悪く水害や旱害を蒙る所は避けなければならぬ。

一、稻田養鯉には如何なる設備が要るか

養鯉田の設備は餘り多くの手数を要しない、たゞ畦畔と注排水口の設備には特に注意をすることが必要である。田は魚の脱出を防ぐ爲注水及排水部に葭簀を建て畦畔は普通より稍や高く且堅牢に造り、崩壊を防ぎ且一部に魚溜りを設ける必要がある。即ち畦畔は高さ一尺位とし大雨の際にも溢れぬやうにする、又畦畔の上部を古俵などで覆へば崩壊を防ぐに効果がある。次に注水口に近く一坪位、水深五、六寸乃至一尺五寸位の深所を設けて魚溜とする。又魚溜りから田の中央部を経て排水部に向ひ一條の溝を造ることもある。之は鯉の取揚には便利であるが夫れだけ作面を縮少するから強いて必要ではない。

一、稻田養鯉の方法

(1) 一年鯉の飼育

稻田を耕し整地して施肥石灰撒布を行ひこれに植付けを行ふ、挿秧後七位して苗の根付いた頃には鯉の這料となるミジンコが澤山發生するからこれに鯉苗を放養する。この時期は地方によつて差異があるが大抵六月下旬から七月上旬の間である。鯉苗は一寸内外のもので青兒と稱ばれて居るが大きなものを選定して一時に放養するのがよく、大小不同のものを放養したり又時日を置いて放養すると成長に甚だしい不揃ひが出来歩減りが多くなる。尙長い間運搬したり數日間蓄養して損傷を與へたものは放養魚斃死するものが多く従つて成績も良くない故健全なものを放養する必要がある。放養尾数は反當り千尾内外が適當で、落水期迄飼養すると取揚數量は稻田の肥瘠管理の如何等によつて異なるが、體長二、三寸から五、六寸のものが一反歩五貫内外から十六、七貫程度の收穫があり、歩留は六割乃至八割が普通である。

(2) 二年鯉の飼育

稻田の設備は前者と別に差異はないが只畦畔を特に高く堅固にし、前年一ケ年間飼育した三、四寸の二歳鯉を反當放養尾數三百乃至五百尾位とするものである。九月落水期迄に體長七乃至八寸位に成長し、反當り二〇貫乃至三五貫位を收納し得られ歩留は八割乃至九割位である。五月上旬頃整地給肥し「代かき」をして直に前記の鯉苗を放養する方法もあり、又飼育して居る鯉兒に飼料を給與して飼育する方法もある。これらの場合は當然收穫を増す、而し乍ら何れの場合でも稲の收穫を減産させる事はない。

一、稻田養鯉と稲作との關係

水田は米を收穫するのが主なる目的であつて、養鯉は副業であるから鯉を放したため米作上に不利を來さぬ様にせねばならぬ。此の點に就ては北見及瀬棚の農業試驗場及試作場で試験した結果鯉を養つたため米の減收もなく亦米質も悪くならぬと云ふことが確められ、一方には養鯉のため餘分の利益が得られ又除草勞力の節約が出来たり、螟虫、泥負虫等の被害を軽減し得らるゝなど間接の利益があることも認められてゐる。

一、稻田養鯉の効果

稻田養鯉は害虫驅除、肥料の節約その他次の様な有利な効果を多くもつてゐる。

(1) 害虫驅除

養鯉に伴つて生ずる害虫驅除の効果に就ては養鯉を行はない隣田と比較して螟虫被害は三分の一内外に軽減されてゐる。又泥負虫、糸みみず等は鯉の最も好む食物でよく捕食するがその排泄物は肥料となる。即ち害虫は肥料に轉化される譯である。

(2) 除草勞力の節約

鯉を放養したる稻田は水深が深いのと魚が常に攪亂し草の種や芽を食べる爲雜草に成長の暇を與へないので除草の回数を節減し得る。

(3) 肥料分解の催進

總て粕類は容易に水に溶解しないが、一旦之が魚に攝られて排泄されると速に分解して稻の成長を助ける。又

魚が遊びで水を攪亂するので空中の酸素は多く之に溶解して諸成分の分解を促し魚が土中の小動物を探索するため土が堀られて空氣の疎通を促して肥料の分解を助長する。

(4) 蛋白質資源の自給

國民標準食糧の蛋白質量八〇瓦中二〇瓦は動物性蛋白質の攝取を要すとされて居るにかかはらず、現状に於ては僅かに其の半量に過ぎない。我が國情に於て動物性蛋白質を歐米諸國の如く主として獸肉に求むることは不可能で之を魚介類に求めるの外はないが戰時下海洋漁業に依る漁獲の減少と輸送力の低下は農山村の住民に蛋白質を攝る機會を益々少くさせて居る。その點稻田養鯉は不足勝な農家への最も簡捷な動物蛋白給源として重要な意義を有する。

(5) 收納

北海道に於ける養鯉田と普通田との比較

北見市北海道農業試驗場北見支場内水田（昭和十七年）

試驗區	種別	面積	放養尾數		取揚尾數	歩留	品種	收穫高	收穫當	備考
			養尾數	當才魚						
第一區	養鯉田	三〇坪	九尾	三尾當才魚	五尾	六二%	坊主六號	一石七斗八升	五升九合三勺	
	普通田	三〇						一石七斗	五升九合三勺	
第二區	養鯉田	三〇	一五〇	五尾當才魚	一〇五	七〇%	坊主六號	一石七斗	五升八合三勺	
	普通田	三〇						一石七斗	五升八合三勺	
第三區	養鯉田	四〇	二八〇	七尾當才魚	二二五	四四%	農林三號	二石三斗	五升八合四勺	收穫高ハ玄米
	普通田	四〇						二石三斗	五升八合四勺	

第四區		養 鯉 田	普 通 田	面 積	放 養 尾 數	坪 當 放 養 尾 數	魚 種	取 揚 尾 數	歩 留	稻ノ品 種	陌 當 收 量(總)	備 考
		養 鯉 田	普 通 田	四〇	四〇〇	一〇	當才魚 三三三	三%	北見赤城 一石七斗 七升九合	四升四合五勺		
		普 通 田	四〇						〃	一石七斗 六升五合	四升四合一勺	

右表に示す如く養鯉をせる稻田は全部增收を示した。

北海道農業試験場渡島支場瀬棚試作場（昭和十六年）

試験區		種 別	面 積	放 養 尾 數	坪 當 放 養 尾 數	魚 種	取 揚 尾 數	歩 留	稻ノ品 種	陌 當 收 量(總)	備 考
第一區	養 鯉 田	普 通 田	四〇・五坪	三三〇	六	當才魚	二三	八五・三	坊主五號	一六七三	
	普 通 田	八							坊主五號	一二〇三	收穫高ハ玄米
第二區	養 鯉 田	四〇・五	二五〇	六	當才魚	三三	八九・三		坊主五號	一八九四	
	普 通 田	八							坊主五號	一五九〇	

瀬棚試作場に於て檜山水産會より稚魚の分譲を受け稻田養鯉を行ひたる試験成績に依れば、鯉の排泄物により米の収量を増し雑草の減少を認めた。

一、稻田養鯉上の注意

- (1) 養鯉稻田は普通田に比すると鯉の排泄物だけ多く窒素肥料が施されるので、窒素成分過多とならぬ様元肥又は追肥に燐酸、加里分を多用する等その土質に應じて適正な肥料の配合が肝要である。
- (2) 放養中の追肥は可及的腐熟したものを使用する。
- (3) 田用水は鯉の生存に差支ない限り極力淺水とし、當歳魚には二寸乃至四寸、二年鯉には三寸乃至五寸程度が最も好結果である。

も好結果である。

- (4) 養鯉田の除草は鯉が餌を攝り乍ら田の全面を常に鯉が攪拌するので二歳魚飼育の場合は殆んど除草の必要がない程である。
- (5) 稻田の除草を要する期間中は一、二回稻田を替へ鯉を輪番飼育して落水した田面は充分空氣に曝す方法をとると稲作や鯉兒の發育が良好となる。
- (6) 水の注排水口附近は特に注意し、特に降雨に際しては水があふれたりする事のない様注意する必要がある。
- (7) 鼠其他によつて畦畔に穴が明けられ漏水する等の被害を被らざる様常に注意する必要がある。
- (8) 魚を補食する害鳥、害獸等は極力驅除しなければならない。
- (9) 廣面積の稻田養鯉は右の被害を分散させ各個の被害を極めて少くし得る。

一、種卵種苗の購入方法

北海道廳の種苗増産計畫に依り、北海道水産孵化場と北海道養魚組合聯合會が種苗の生産に當つて居る。希望者は左記へ申込めたい。

札幌市外中ノ島 北海道水産孵化場内

北海道養魚組合聯合會

昭和十七年度鱈親魚捕獲採卵成績表

(機鱈、樺太鱈、紅鱈ヲ含ム)

事業場名	捕獲	雄	雌	計	使用	雄	雌	計	採卵
千歳	二四二	八五	二二	二六	二四二	六九	二一〇	二一〇	三、五〇〇
尻別	一八三	四八	一五	三三	一五六	三八	一九四	一九四	二、一五〇
朱太	四三	一八	三	二一	九四	四二	四二	四二	七、七五〇
天鹽	一、三七六	五四七	五〇七	一、〇四四	一、〇三	七一〇	七一〇	七一〇	一、一三六、〇〇〇
徳志	四、七三七	一、六三三	八三三	六、三六六	二六九	一、一〇一	一、一〇一	一、一〇一	一、四六二、〇〇〇
頓別	三〇	四三	二六	七九	二六	四〇	四〇	四〇	三〇、〇〇〇
本場管内計	六、八九〇	二、五三〇	一、九八三	九、四一三	六六	二、六七〇	二、六七〇	二、六七〇	三、九五三、〇〇〇
虹別	一、三四四	一、一六八	一、三四	二、五二六	三三四	一、四六八	一、四六八	一、四六八	一、七四〇、〇〇〇
風連	一九六	一〇七	一三	二〇六	四八	一六二	一六二	一六二	一、四〇〇、〇〇〇
當幌	三、四四五	三、四八〇	三、四	七、三六九	一、〇七八	四三七	四三七	四三七	五、八〇、〇〇〇
標津	二、七六九	三、四二六	一、七三三	六、九二八	四三	二、八五二	二、八五二	二、八五二	二、五七五、〇〇〇
伊茶	一五二	一七	三三八	一、〇七五	四三	一五五	一五五	一五五	一、七五、〇〇〇
虹別支場管内計	四、八〇五	五、三三〇	一〇、一七五	一〇、一七五	一、六四六	五、〇九二	五、〇九二	五、〇九二	五、一八二、五〇〇

北見	二、七四六	二、七三八	五、四八四	四、八	六〇	一、六四三	一、六四三	一、六四三	三、七五〇、〇〇〇
斜里	五、四九八	四、八二〇	一〇、三一八	二、一二二	五三	二、六四三	二、六四三	二、六四三	二、七五〇、〇〇〇
湧別	一、九四三	三、二八三	五、二二六	一、四八	五	一、四九	一、四九	一、四九	一、七五〇、〇〇〇
網走	一九	三三	四二五	八八	二五	一三	一三	一三	一、七五〇、〇〇〇
〇興部	五四	一八	二七	四七	一〇	五七	五七	五七	一、六五〇、〇〇〇
〇岩内	三、七九	六六	一、〇一五	二一八	六五	一八三	一八三	一八三	一、六五〇、〇〇〇
〇幌内	二、五五	五〇	七五六	二、九三〇	七六	三、六七八	三、六七八	三、六七八	三、六六六、〇〇〇
北見支場管内計	二、〇六六	二、二二〇	二、三六六	二、九三〇	七六	三、六七八	三、六七八	三、六七八	三、六六六、〇〇〇
音根	四〇五	三〇	七五	五七	二〇	五九	五九	五九	四、八五、〇〇〇
温根	四〇五	三〇	七五	五七	二〇	五九	五九	五九	四、八五、〇〇〇
國後支場管内計	四〇五	三〇	七五	五七	二〇	五九	五九	五九	四、八五、〇〇〇
擇捉	五、五三六	九、〇四三	一四、五八一	四、六六七	二、二二四	六、八八一	六、八八一	六、八八一	五、九九八、〇〇〇
當路	一、九二四	三、一〇一	五、〇二五	六八七	二八	九七五	九七五	九七五	一、四六四、〇〇〇
老門	二、二五	二、二四四	四、四九四	一、九一	八四九	二、七五〇	二、七五〇	二、七五〇	二、三八八、〇〇〇
別飛	八、七二〇	一八、二二五	三六、九二五	五、七四六	三、五〇七	九、二五三	九、二五三	九、二五三	一、一〇三、〇〇〇
留別	八、七二七	一三、六八〇	二二、三九七	七、九〇九	四、〇三	一二、九二一	一二、九二一	一二、九二一	八、〇〇〇、〇〇〇
比良	八、九〇	二五、四〇九	三三、五九六	三、七九六	二、七八〇	六、五七六	六、五七六	六、五七六	五、一三〇、〇〇〇
擇捉支場管内計	三、〇三三	七、一五五	一〇、六八六	二、四六六	一、六四〇	三、八三六	三、八三六	三、八三六	三、四三三、〇〇〇
合計	五、四六八	九、二〇四	一五、〇五三	三、四一四	一、六四〇	五、〇九二	五、〇九二	五、〇九二	四、七五〇、〇〇〇

昭和十七年度鮭親魚捕獲採卵成績表

事業場名	雌雄計			便用親魚數(尾)			採卵數(粒)	至自期 月日 月 間
	雌	雄	計	雌	雄	計		
千 歲	一一、四三三	二三八、三九	二五、九三三	一〇、四八七	五、一六三	一五、六四九	二七、五八、五〇〇	二・九・二
尻 別	二五三	三六六	六二八	一七三	八五	二五八	三、五五、〇〇〇	一〇・一
朱 太	五七一	七〇〇	一二、七一	五四〇	三二四	八六四	一、三八、二〇〇	二・九・七
敷 生	二六七	二八五	五四二	一四八	八四	二三二	四、一四、四〇〇	一〇・二
勇 拂	五五〇	六〇四	一、一五四	五四八	二五二	七九九	一、二四、六〇〇	一〇・〇
染 退	一、一四二	八九三	二、〇三四	九五一	三四〇	一、二九二	一、八六、八〇〇	二・一・六
三 石	二三八	一二四	三六二	二二七	七九	三〇六	五、八六、五〇〇	一〇・四
元 浦	八三三	四五六	一、二八八	七九〇	二二五	一、〇一五	一、九七、七〇〇	二・三・五
幌 別	五八三	三七二	九五四	五四三	二三八	六八一	一、二五、〇〇〇	二・〇・八
天 鹽	五、〇八四	六、一一九	一一、〇三三	二、七四三	一、四八九	四、三三二	五、四九、〇〇〇	二・三・一
德 志	一八〇	一四四	三二四	一四八	六五	二一三	三、二五、〇〇〇	二・九・七
頓 別	二、九七七	三、九五五	六、九三二	二、五九八	九一八	三、五一六	五、六〇、〇〇〇	二・〇・一

本場管内計	二四、〇二八	二七、八六六	五二、八九四	一九、九〇六	九、一六〇	二九、〇六六	四七、七、七、九〇〇	九・二・一
虹 別	七、七七七	九、〇三四	一六、八二二	七、四二二	二、五二七	九、九四九	一四、一〇、〇〇〇	一・九・一
風 蓮	七〇三	五四八	一二、五〇	四八〇	二九九	七七九	一、一四、五〇〇	一・〇・一
標 津	七、五六九	七、八六四	一五、四三三	五、〇四三	三、〇五三	八、〇九五	一、一七、七、五〇〇	一・〇・一
伊 茶 仁	三、四三三	五、六二四	九、〇五六	九九〇	四六〇	一、四五〇	二、二九、七、五〇〇	二・九・一
薰 別	二、二八六	二、三九八	四、六八四	一、七九七	七二六	二、五二三	四、二五、〇、〇〇〇	二・九・五
目 梨	三五六	二五一	六〇七	三一五	一七九	四九四	七、四〇、〇〇〇	一・〇・五
虹別支場管内計	二二、六二二	二五、七三九	四七、三六一	一五、六六六	七、二四三	二二、九〇九	三、四、三、〇〇〇	二・九・〇
北 見	一四、七九〇	一五、九八五	三〇、七七五	四、四九三	一、四三四	五、九二七	二、三、二、五〇〇	二・九・〇
湧 別	五、五九九	九、六三六	一五、二三五	一、一三四	四九六	一、六八〇	二、九、〇〇、〇〇〇	二・九・一
斜 里	二四二	三三七	五七九	二二七	一一九	三四六	六、一七、五〇〇	二・九・一
網 走	二七、五三〇	三二、三三一	五九、八六一	五、五三〇	二、一三八	七、四八八	二、六、〇〇、〇〇〇	二・九・五
興 部	二五五	二五九	五四四	一五四	四四	一九八	二、七、五〇〇	二・〇・七
幌 内	六九八	一、二七五	一、九七三	一九八	七五	二七三	五、一五、〇〇〇	二・〇・七
北見支場管内計	四九、〇九四	五九、八三三	一〇八、九二七	一一、六五六	四、二六六	一五、九二二	二九、四、二、五〇〇	二・一・八
渡 島	六、二三八	四、三九一	一〇、六二九	四、九七一	一、六六二	六、六三三	一五、五五、〇〇〇	二・〇・一

厚澤部	知内	利別	渡島支場管内計	國後	二木城	音根別	温根沼	泊	國後支場管内計	擇捉	老門	羅白	年萌	留別
三〇六	七六九	二〇〇元	九、三三三	三、四三三	七、七四八	一、七二八	九三〇	八四四	二、四六四	四、四七	五、二七二	四、二六一	二、三三五	四、六四二
五二五	一、五二五	一、九三三	八、四三三	九、二九三	七、八九四	一、九二一	一、四八八	九二九	三、一三五	五、二七九	八、三八八	一、八八六	三、九三三	六、〇七五
八二	二、一九四	四、〇〇一	一七、七六六	三、七六六	一五、六四三	三、七六六	二、五八八	一、七七一	四、九八八	一〇、四三六	二、六〇〇	一、六〇七	六、二三八	一〇、七七一
一四七	五七五	一、二二六	六、八二九	一〇、二九六	三、四八八	一、三三三	六九七	五二	一六、三〇八	四、〇二九	三、一六	三、二五六	二、〇四	四、三四一
一四三	二四八	四、五五	二、五八	五、一〇二	一、〇八八	九三	二四八	二〇〇	七、七九	一八、七三	二、九五	一、七二	九四三	二、一四四
二〇	八三	一、五九一	九、三三七	一五、四九〇	四、五九四	二、二四四	九四	八二	二四、〇八七	五、〇七	五、四五六	四、九六六	二、九七七	六、四八五
八、二、五〇〇	一、六、五〇〇	三、一、六、五〇〇	一〇、七、〇〇〇	二〇、三、七、〇〇〇	六、九、〇〇〇	二、八、五〇〇	一、七、〇〇〇	九、二、〇〇〇	三、二、〇〇〇	七、〇、〇〇〇	八、五、八七五	八、七、四、五〇〇	三、一、〇〇〇	八、七、七、〇〇〇
一〇・一	一〇・一	一〇・一	一〇・一	一〇・一	一〇・一	一〇・一	一〇・一	一〇・一	一〇・一	一〇・一	一〇・一	一〇・一	一〇・一	一〇・一

別飛	當路	比良糸	擇捉支場管内計	十勝	雪裡	銅路	尾幌	十勝支場管内計	合計
二、五九九	三、四〇四	二、九三三	九、四一三	五、八、三三三	三、五三〇	二〇、一〇三	一、六〇四	六、三、六九二	二、三、八〇四
三、一、八六六	九、七六六	七、九三九	二、八、〇九二	四、五、〇〇〇	五、七四一	三、一、七九九	一、一、八四四	八、四、三三四	三、六、五、五三三
五、一、〇〇〇	一〇、八三三	三、三、五五五	七、二、二二	八、七、七五五	九、七七一	五、二、〇〇三	二、八八八	一四、七、九六六	六、四、九、三三七
二、五、八三三	一、九、八六六	二、二、二二	七、二、二二	一、八、五三六	二、八、二二	三、四、四七七	一、四、七七	三、五、七七	二、七、六六七
一〇、六、七七	九、五三三	二、三、三三	三、九、四六六	九、九、二八	一、五〇〇	九、六、三三	一、〇、八四	二、一、六六四	九、二、四六五
二、六、三九九	二、九三三	四、五三三	一、二、九六六	二、八、四四四	四、三三三	二、五、六六	二、五〇一	五、八、八五五	二、七、三三三
三、一、八六六	四、三、一、〇〇〇	五、〇、〇〇〇	一四、〇、五、八、〇〇〇	四、七、〇、〇〇〇	七、〇、五、二、五〇〇	三、五、四、四、〇〇〇	三、一、三、五、〇〇〇	八、七、五、七、五〇〇	三、九、三、二、六、一、〇〇〇
一〇・一	一〇・一	一〇・一	一〇・一	一〇・一	一〇・一	一〇・一	一〇・一	一〇・一	一〇・一

〇十勝支場昇格

北海道水産孵化場十勝事業場（十勝國河西部大正村字幸震）は十七年五月六日支場に昇格せられて所管區域も從來虹別支場に所屬してゐた釧路、尾幌、雪裡の三事業場を傘下に收めこゝに釧路二國の孵化場の鎮臺となつた。

新興十勝支場の全貌左の如し

所屬事業場 四
 所屬捕獲場 一五（内直營九ヶ所委託六ヶ所）
 親魚捕獲豫定數
 鱒 三、〇〇〇尾
 鮭 七八、〇〇〇尾
 採卵豫定數
 鱒 一、二〇〇万粒
 鮭 五、〇〇〇万粒

因みに初代支場長は同場主任たりし幸内慎治郎技手が其儘昇進せられた。今後同場は本道鮭鱒孵化事業の樞軸として發展を希望するものである。

○白人事業場に昇格

舊十勝鮭鱒養殖水産組合が心血を注いで築いた元の十勝事業場の分場たりし白人孵化場は十七年九月十四日出度事業場に昇格せられ初代事業主任は本道鮭鱒人工孵化事業界の耆宿たりし故鴨川豊氏の御子息鴨川肇農林技手が就任せられた。

○十勝支場新装成る

十勝支場昇格と共に從來の事務所は狹隘なるに鑑みて之が新築を企圖せられて居つた處十勝鮭鱒養殖水産組合が解散せらる事になつた爲同組合の最後を飾る記念事業として事務所と官舎の新設寄附方を申出られたので急速に計畫が進められ、十七年七月一日に起工し十月二十二日に竣功せられて十一月三日の佳節を以て移廳式を舉

行せられた。新支場事務所は建坪二八坪木造平家建、基礎布コンクリート仕上、屋根は瓦葺、壁體外部モルタル、内部眞壁漆喰仕上げの瀟洒たるものである。

支場長官舎も事務所に劣らぬ立派なもので、建坪二五坪七合五勺構造は事務所と同様である。以上の工事費一萬七千圓其他附屬工事費二千五百圓計一萬九千五百圓は全部十勝鮭鱒養殖水産組合の寄附に依つたものである。

同組合の美學に酬ゆるに新装成る事務所に執務せらるゝ場員諸氏の孵化事業に對する今後一層の精進を期待するものである。

雜報

北海道鮭鱒保護協力組合文化部 部會入會案内

北海道鮭鱒保護協會は第十四回總會の決議に基いて解散することに決定同會の事業は北海道鮭鱒保護協力組合文化部會に移されて從來の協會員は本誌に添付せる入會

申込書を以て入會申込を爲せば直ちに入會出来ることになつたが協力組合について御存知ない會員もあることと思はれるから簡単に説明する。

協力組合は前身は北海道鮭鱒保護組合と稱して昭和十三年十一月十五日に北海道鮭鱒孵化場より採卵用鮭親魚の捕獲委託をうけて居つた全道の鮭鱒漁業者團體に依つて設立せられ、孵化事業の積極的協力を爲すべく各構成團體から總額年四萬圓の負擔金を醸出して孵化場の施設改善に協力して來た昭和十六年度より親魚捕獲が孵化場の直營となつたので構成員は其儘にして十六年五月八日に北海道鮭鱒保護協力組合と改組した。新團體協力組合は從來より一層高度の協力性を持ち十六年度に於ては地方費に五萬圓、其他約二萬圓餘の協力を爲したが更に十七年度に於ては地方費に五萬圓、其他施設充實費として約六萬圓、計十一萬圓の協力費を豫算に於て計上して居り着々實施中である。斯くの如く近來識者に憂慮せられて居る水産孵化場の荒廢せる施設の改善擴充に今後も一段と努力せんとする文字通り高度の協力性をもつた團體である。

然し同組合は物質的協力の止まらず、水産増殖事業の文化性昂揚も夙に企圖せられて居つたので、從來文化

方面に相當功績あつた協會が欣然之に合併することになつたのであるが新誕生の同組合文化部に於ては持前の強力性を發揮して近來不振の鮭鱒彙報の發行回數も年二回に強行することになつてゐる。

新入會員に對しては本年度は會費は徴收せぬ方針であるが將來必要あるときは徴收する意圖である。

舊協會員諸君は舊つて入會せられんことを希望する次第である。

尙文化部の規程は左記の通りである。

北海道鮭鱒保護協力組合文化部規程

第一條 本部會ハ北海道鮭鱒保護協力組合ノ事業中文化的昂揚ヲ圖ル方面ヲ擔當スルヲ目的トス

第二條 本部會ハ北海道鮭鱒保護協力組合文化部ト稱ス

第三條 本部會ハ北海道鮭鱒保護協力組合員ノ外北海道

養魚組合聯合會員及鮭鱒其ノ他ノ漁業又ハ養殖事業者並ニ之ニ關係ヲ有スル者ヲ以テ組織ス

第四條 本部會員ノ種類ヲ左ノ如ク分ツ

一種會員 北海道鮭鱒保護協力組合員、北海道養魚組合聯合會員及鮭鱒其ノ他ノ漁業又ハ養殖業者

二種會員 鮭鱒其ノ他ノ養殖及漁業ニ關係ヲ有スル者

第五條 本部會ハ其ノ目的ヲ達スル爲左ノ事業ヲ行フ

一、鮭鱒其ノ他ノ養殖及漁業ニ關スル調査、試験研究、鑑定紹介及質疑應答

二、機關誌及有益ナル圖書ノ刊行

三、鮭鱒其ノ他ノ養殖及漁業振興上必要ナル普及宣傳

四、其他必要ト認ムル事項

第六條 本部會ニ左ノ役員ヲ置ク

部會長 一名

評議員 若干名

第七條 部會長ハ北海道鮭鱒保護協力組合理事長之ニ當ル

評議員ハ會員中ヨリ部會長之ヲ指名ス

第八條 役員ノ任期ハ三年トス

補欠就任シタル者ノ任期ハ前任者ノ殘任期間トス

第九條 總會ノ決議ニ依リ本部會ニ顧問若干名ヲ置クコトヲ得

第十條 部會長ハ本會事務ヲ擔當スル者ヲ任命及囑託スルコトヲ得

て來たりしが、親魚捕獲事業の官營移管と共に大體孵化事業は一貫して官營化する爲、各組合は之に對應して解散の意圖ありし處道廳水産課に於ては之が解散方針を明らかにする爲十七年五月三十日關係組合招集の上整理要綱を發表せられた。

同要綱に依ると水産組合は速に解散すること。財産の處分方法は總財産（協力組合出資金ヲ除ク）を三分分し一は役職員及組合員の功勞金、退職給與金、記念品等に充て、一は孵化場の事業に充當を條件に協力組合に寄附一は地方的孵化事業協力團體に寄附（但し同團體の結成完了する迄は協力組合に於て保管すること）すること。尙協力組合の出資金は地方協力團體に寄附することに提示せられた。

右に依ると地方協力團體は水産組合の發展的解消に伴ひ創立せられるので同團體が如何なる構想の下に生れるかについて同要項に依ると左の要件の具備が絶體必要となつて現はれてゐる。

一、水産組合解散後ハ水産組合員中ノ鮭鱒漁業者及ヒ水産組合員ニ非サル鮭鱒漁業者ヲ以テ地方的ニ必要ナル鮭鱒養殖ニ協力スル團體ヲ組織スルコト
右團體ノ地區ハ地方ノ狀況ニ依リ適宜定ムヘキモ

第十一條 本會ノ經費ハ左ノ財源ニ依ル

一、北海道鮭鱒保護協力組合文化部資金

二、部會員ノ負擔金

三、篤志者ノ寄附金

第十二條 本部會會計年度ハ毎年四月一日ニ始マリ翌年三月三十一日ニ終ル

第十三條 毎年一回總會ヲ開キ會務ニ關スル決議ヲ爲ス外必要ト認ムル協議研究ヲ行フ

第十四條 部會長ニ於テ必要ト認ムル場合ハ隨時役員會ヲ開キ會務ヲ處理ス

附 則

本部會則ニ規定セザル細部ノ事項ハ役員會議ニ於テ之ヲ定ム

○鮭鱒養殖組合整理せらる

本道民間鮭鱒人工孵化事業として特異の存在たりし鮭鱒養殖水産組合は其の歴史何れも古く、且又孵化事業に對しては自ら從事或は親魚の捕獲に當り、之が収益は殆んど擧げて孵化場の施設に寄附する等多くの功績を盡し

孵化場ノ擔當區域ニ適スルヲ原則トスルコト

二、地方協力團體ノ有スル資金及之ヨリ生スル收入ハ鮭鱒孵化事業以外ニ充當セサルコト

三、地方協力團體ハ地區内鮭鱒漁業者ヲ以テ組織スルノ外從來孵化事業ニ對シ特ニ功績アリト認ムル者ヘ顧問ニ推舉スルコトヲ得ル

其他に地方協力團體は協力組合の下部組織的役割をなし孵化事業に最善の協力を爲すことと、將來協力團體の一元的統合を必要とする場合は無條件参加と云ふことが示されてゐる。

即ち右要綱に依ると鮭鱒漁業者を以て組織すること。地區を孵化場の支場單位とすること及び收入は全的に孵化事業に充當することが強調せられてゐることが注目せられ隨つて同組合は如何なる性格を帯びるものなるか大體に於て窺知せられるものである。

其他、規約例、解散手續方法に就いて種々と示されたが當日參會組合は同要綱方針に即應することに決定したのである。

其後根室、十勝、國後、網走、紋別、枝幸は夫々解散の手續を終了して名實共に解散せられたのである。後は天鹽が一つ残つてゐるが同組合も近く解散の豫定であ

る。
夫々地方にあつて水産界の大きな存在であり、亦宜く孵化事業に對し高度の協力をなしてきた名實共に公益法人として風格を示して來ただけに之が解散は關係者にとつては寂しい事であつたことと思はれるが、然し既に新しい協力團體が生れんとしてゐる。新しい希望をもつて各位の今後益々孵化事業に對する努力を希望するものである。

○十勝鮭鱒養殖水産組合解散せなる

本道民間孵化事業界の雄、十勝鮭鱒養殖水産組合は其の使命を果し解散せらるゝことになり十七年十一月三日北海道水産孵化場十勝支場に於て解散式を舉行せられた。

回顧すれば同組合こそは實に十勝地方に於ける鮭鱒漁業の生きた歴史で其の消長たるや迂餘曲折波瀾万丈眞に數奇な運命を辿りつゝ今日に見る隆盛さを克ち得たのである。

開拓時代迄の十勝平野の母胎たる十勝川は鮭鱒族の産卵の温床であつたが、明治初年後旺盛なる開拓魂は急激

な開發となり、それと共に鮭鱒は濫獲せられて産卵床は荒廢其の極に達し、明治二十年代にはさしも聲價を誇りし十勝鼻曲りも不漁となり業界には深刻なる嵐が吹き荒む様になつたのである。それで之が打開策として明治二十八年關係業者の有志に依つて同組合が創立せられて帯廣市外に人工孵化場を設置したのであるが、然し其後製糖工場の排水の爲收容卵の全滅となる様な悲運に逢着したので、昭和四年に今の十勝支場の場所を發見こゝに孵化場を築いたのである。

然して昭和九年には孵化事業官營と共に施設を全部國に寄附して昭和十三年には採卵數の激増の爲收容力の擴充に想を致して、幕別村白人に孵化場（收容能力三千萬粒）を獨力克く建設之亦國に寄附したるもので終始一貫同組合は孵化事業の爲努めたものである。民間孵化事業關係團體に於て最も優良堅實なる組合と斯界の推賞をうけたるも宜なるかなである。

さもあれ十勝川は今や漁獲に於て二千石を算せられ本道有數の生産額を示す様になつたが之は偏に官民の完全なる協力の賜である。

組合長の齋藤兵太郎氏、副組合長の水澤一郎氏は共に同組合の至寶であり、その功績は忘れられないものである。

る。

悠久永へに流れも絶へぬ十勝川と共に同組合の輝しき業績は永久に忘れられぬことであらう。

因に同組合は解散と共に十勝支場を建設之を寄附、亦孵化事業援後協力費として一万五千圓、北海道鮭鱒保護協力組合に寄附せられた。創始以來の寄附金の總額は實に二十萬圓以上に及ぶものにして深く吾人は此の協力的を銘記せねばならぬと想ふ。

○紋別鮭鱒養殖水産組合解散せらる

紋別鮭鱒養殖水産組合は十七年八月二十七日に紋別町に於て關係官民四十有餘名參集の上盛大なる解散式を舉行せられた。

同組合は明治十八年紋別郡の水産物營業人に依る鮭漁業組合及鯉魚組合の創設に起り、明治二十一年六月鮭漁業組合、鯉魚組合を合同し紋別水産漁業組合を組織し、明治二十五年より魚介類の養殖保護を目的として管内湧別川へ鮭の天然放卵保護の爲監守所を設け鑑札下附制度に依り鮭上産卵期間中監守人をして取締の勵行等の事業に従事中明治二十六年紋別納稅所の設置により水

産税は同委員の取扱ふ事となり、組合規約を改正し事務所を開設、こゝに始めて一ヶの團體を形成することになつたのである。

明治三十三年三月重要物産同業組合法發布と共に前記組合の改組を行ひ郡單位の紋別水産組合を組織し水産業の改良發達、水産動物の保護及製品検査等の事業遂行中大正十年四月水産會法の公布に伴ひ製品検査事業は新設水産會に移管し、既設水産組合の定款を變更、大正十三年七月紋別鮭鱒養殖水産組合と名稱し、之が事業として紋別郡上湧別村字開盛に鮭鱒卵壹千貳百萬粒收容の人工孵化場を設置、人工的鮭鱒孵化養殖に力をそゝぎ、後昭和十五年紋別郡瀧上村に鮭鱒貳百五十拾萬粒收容の人工孵化場を設置し斯業の貢獻に努力せられたるものである。

然して昭和九年鮭鱒孵化事業の全面的國營移管と共に其の施設を國に寄附し、更に昭和十二年管内雄武村字幌内村へ參百萬粒收容の人工孵化場を設置し直ちに之も國營に寄附と爲したるものである。

國營移管後は管内湧別川、渚滑川及び幌内川の各河川に於ける鮭鱒親魚捕獲採卵事業の依託を受け之が事業に服し傍ら昭和十三年十二月紋別町大字藻龍村字元紋別に鮭卵貳百萬粒收容の人工孵化場を設置し藻龍川浜上の鮭

の捕獲採卵孵化事業に従事したのである。

○地方協力團體の誕生

昭和十六年には受託事業たる親魚捕獲も道廳直營となるに及び大體同組合の使命は修了したるもので、こゝに解散せらるゝこととなり解散に伴ひ孵化事業施設費として北海道鮭鱒保護協力組合へ八千八百圓寄附せられた。北見地方水産界の重鎮たりし同組合も解散と共に一應解消するが新たに同地方の關係者に依りより強力な鮭鱒孵化事業の新しい組織に近く生れると云ふ。先人の功績に想ひを致し尙一層斯界に寄與せられん事を切望するものである。

因みに同組合長たる本道水産界の重鎮大西眞平氏の功績も忘れてはならぬことを付け加へて置く。

○根室、網走、國後、枝幸養殖水産組合の解散

根室外三地方の養殖水産組合も夫々客年解散せられたが各組合の解散記事は紙數の關係上割愛して次號に掲載したいと思ふから惡しからず御了知を乞ふ。

本誌雜報登載の鮭鱒養殖水産組合の整理に伴ひ新興地方協力團體の創立が約束づけられたが此程目出度二つの強力な團體が誕生した。何れも孵化事業に最高度の協力をなさんとする公益奉仕團體なることが好ましい。吾々は今一人でも多くの孵化事業に理解のある人を求めてゐるこの時にこの新興團體の健全なる發達を心から希望してやまないものである。

團體は左の二つである。

根室鮭鱒養殖協力組合（組合長 稻垣 龍氏）
組合員 一四九名
國後鮭鱒養殖協力組合（組合長 向井勇次郎氏）
組合員 八二名

○孵化事業従事者の子弟教育道場現る

北海道水産孵化場の鮭鱒孵化事業場は大體交通不便な山間の僻地に在り訪づるゝ人も稀な所が少なくない隨て文化施設等あらう筈もなく國民學校へ行くのに二里の道を

通はなければならぬ、それはまだ良い方でひどい所になると附近に學校がないので、幼い小供を學校所在地に寄宿させて義務教育を受けさせる親子兄弟離れ／＼の生活をする實にお氣の毒な状態にあり、こうした事業場に勤務せられる職員各位に對し心から同情申上げる近時の世相は動もすれば名利に走る者が多い中にこんな恵まれない境地に不平一つ洩らさず黙々として職域に全靈を打込で挺身しつゝある之等産業戰士の崇高なる精神には自ら頭の下るものがあり、斯様な境遇に對しては何等か酬ゆる所がなければならぬと終始痛感したのであつた。

所が孵化場當局に於れても夙に思を此處に致し種々對策が研討せられ、其の結果成案を得たのが職員子弟の教育である、其の趣旨は子弟中には中々の秀才が居り亦自らも向學の意慾に燃ゆる者も少なくない、父兄又勉學を念願して止まないものであるが財政の都合もあり藉に餘裕があつて可愛い小供を監督者なしで都會へ放つことは不安で遂に機會を失ふと云ふ實情であり、成すべくして成し得ざるこの有様に鑑み之等子弟を札幌に集め一定の寮舎に收容して中等教育を施し一人前の人間として社會に送り出し思ふ存分に活躍せしめて皇國の御役に立てよう云ふので本年から實施するので其の方法は、先づ國民學校

高等科を卒業した者を毎年五名づつ役所の給仕として採用し給料を與へ、晝は水産増殖の智識を修得させ夜間三年制の中等學校に通學せしめて中等教育を完了し、更に成績の優秀なる者には育英資金制度を設けて大學教育までも授ける仕組で、而も修業後に於て何等の義務も課せず孵化事業に携はろうと他の職に就くが全く本人の自由意思に任せる誠に有難い制度である、此の制度は永久に續くので孵化場職員に取つての一大福音であらう。

擬て實施するとなれば急ぐのは收容する寮舎、即ち子弟教育道場であるが建設資金が乏しいので當局も行惱んで居た所が偶々青森市の豪商若井善藏氏が此の高遠な企圖を知り痛く感動せられ揮つて工費二万円を寄附せられたので、札幌市外雁來村の岩田徳治氏に請負しめて起工することになつたが時局下資材勞力共に不足で何時竣工するかを疑はれたのであるが同氏も此の趣旨に賛同し利益を度外視し工事を進めたので豫定通完成し、昨年の十一月四日落成式が舉げられた。兩氏の美舉は大に賞讃すべきである、當日若井氏は寄附の動機に付て重い口調で次の様に語られた。

「私は業務の爲屢々千島方面に往來して同方面に於ける孵化場従業員の餘りにも恵まれざる日常生活を見

會報

第十四回總會記事

本會第十四回總會は昨年六月十八日釧路市公會堂に於て開催せり。概況を左に要録す。

一、出席者（順序不同）

加藤六藏	上野卯八郎	石井文吉
山田知治	青木定行	清野文二
猪瀬善晴	寺崎藤吉	風上源吉
佐熊廣平	金澤濱次郎	淺野政勝
榎本仁太郎	水澤一郎	加藤梅太郎
古都儀	小野政秋	押味幸
淺沼美義	高橋恒藏	池田義良
野田信俊	幸内慎治郎	大導寺政治
八木澤繁次	高田千代吉	西川岩吉
川島幸三郎	廣部幸太郎	渡邊寅市
武田尙秀	小田部敬止	田中林藏
三國友之助	齋藤榮三郎	佐藤庄司
辻仲	堺哲彌	桑原武雄
富永眞佐利	半田芳男	片山亮

道場は孵化場上の高臺に建られ六十五坪で些して大きくはないが子弟居室の外修養室の設備もあり構造の妙を得嚴として心氣自ら静まるが一面満和氣堂の感を深からしむるものがある。此の建物は純眞無垢で潑刺たる若さを持つ少年の修養場であるから、之を表徴すると若井氏の篤行を永く顯彰する意味を含めて若人寮と命名せられた。斯して裝備は完成した職員たるも孵化場の親心に感謝し職域に奉公に努むると共に此の道場の健かなる發展を期すべきである。

飯塚力雄	若林友二	内海重左衛門
高橋健吉	橋本興作	松田正一
大西眞平	齋藤主計	井筒宇三郎
高木爲吉	齋藤常市	稻垣龍

(以上五十四名)

二、経過

第十四回總會提出議案

第一報告事項

一、事業報告

(一) 會員數 (昭和十七年三月三十一日現在)

一種會員	百一名	舊親魚捕獲受託者	三十一名
		養殖事業受託者	二名
		養殖事業經營者	十七名
二種會員	百七十八名	鮭鱒漁業者	五十七名

計 二百七十九名

備考 十六年度中ノ異動ハ入會六名、脱會一名ナリ

(二) 機關誌ノ刊行

鮭鱒彙報第四十二號當路孵化場創立五十周年記念特輯號ヲ刊行シ會員並ニ關係官廳其ノ他ニ配付セリ。

(三) 會議

第十三回總會ハ十六年五月十日函館市ニ於テ開催シタルニ出席者六十一名ニシテ甚ダ盛會ナリキ。

役員會ハ十七年六月十六日北海道水産孵化場會議室ニ於テ開催シタルニ十二名出席、第十四回總會提出議案本道鮭鱒孵化事業民間功勞者推薦ノ件及ビ北海道鮭類種卵種苗配給統制ノ件ニ付協議セリ。

(四) 普及宣傳

孵化場參觀ノ名士ニ對シ參考文獻ノ贈呈及ビ座談會等開催シ普及宣傳ヲナセリ。

(五) 助成

(イ) 改良孵化方法新考案懸賞募集

前年度ヨリノ繼續事業ナルモ應募數尠キ爲更ニ締切期間ヲ延長シ次年度ニ於テ之ヲ發表セントス

(ロ) 孵化場繪葉書寄贈

孵化場繪葉書貳千組作製シ之ヲ北海道水産孵化場ニ寄贈セリ。

(ハ) 孵化場案内パンフレットノ寄贈

孵化場案内パンフレット壹千部作製之ヲ孵化場ニ寄贈セリ。

(ニ) 圖書ノ寄贈

北海道水産孵化場ニ孵化事業ニ關スル文獻不足ナルニ鑑ミ約四十冊ノ圖書ヲ購入之ヲ寄贈セリ。

(ホ) 醫療救急箱ノ寄贈

前總會ノ決議ニ依リ醫療救急箱二十個購入北海道水產孵化場ニ寄贈セリ、尙僻遠ノ地ニアル事業場二十個所ノ選定ハ同場ニ一任セリ。

(六) 特別事業

(1) 孵化場勤務雇員以下退職金贈呈

前總會ノ決議ニ依リ之ヲ實施セントシタル處本懸案ノ對象タル永年同場ノ勤務者タリシ雇員各位ハ當局ノ果斷ナル御處置ニ依リト六年度中ニ殆ンド孵化場技手(地方吏員)或ハ農林技手ニ昇進セラレ今後モ亦下級場員ニハ果進ノ道拓カレルコトニナリ本案ノ目的ハ行ハスシテ達成セラレタリ仍テ之ガ施行ヲ中止セリ。

(10) 北海道鮭鱈孵化事業史ノ刊行

本事業史ハ北海道水產孵化場ニ於テ着々資料ノ蒐集ヲ行ヒ居リ、更ニ次年度ニ於テモ之ヲ繼續セントス

(11) 表彰

前總會ノ決議ニ依リ北海道鮭鱈孵化事業ニ關係ヲ有スル民間團體ヨリ同事業ニ貢獻セル功勞者ヲ表彰センカ爲關係各團體ヨリ推薦セシメ之ヲ役員會ニ於テ諮リタルトコロ左記功勞者ヲ表彰スルコトニセリ。

備考 右表彰式ハ本總會終了後之ヲ行フモノトス

道養魚組合聯合會ニ意見ヲ求メタル處私案ノ提示アリタルニ依リ之ヲ役員會ニ於テ審議ノ結果別紙私案ヲ決定セリ仍テ之ヲ報告ス

北海道産鮭類種卵種苗配給統制要綱私案

一、鮭類種卵種苗配給統制委員會(以下委員會ト稱ス)

(一) 組織

1 主務官廳(參與)

2 北海道養魚組合聯合會(以下聯合會ト稱ス)理事中ヨリ互選ニ依ル三名

3 聯合會役員ニ非ザル同會所屬養魚業者中ヨリ主務官廳ノ推薦ニ依ル代表者三名

(二) 委員會ノ事業

1 本道ニ於ケル鮭類種卵種苗ノ配給計畫ノ樹立

2 鮭類種卵種苗出荷者(以下出荷者ト稱ス)ニ對スル出荷ノ指圖

3 鮭類種卵種苗需要者(以下需要者ト稱ス)ニ對スル荷受ノ指圖

4 官廳拂下種卵種苗ノ割當

5 取引價格ノ指導

(三) 委員會ノ代表者

孵化事業民間功勞表彰者氏名(順不同)

今井 藤吉君	元枝幸鮭鱈養殖水產組合職員
長谷川 清吉君	元網走鮭鱈養殖水產組合職員
松崎 助三郎君	元泊野化場經營者
山下 庄太郎君	國後養殖水產組合評議員
土屋 仙吉君	日高水產會捕獲場主任
飯田 石藏君	同
大導 寺政治君	紋別鮭鱈養殖水產組合主事
富永 眞佐利君	根室鮭鱈養殖水產組合職員
八木 安太郎君	根室鮭鱈養殖水產組合副組長
竹林 龜太郎君	三石漁業協同組合理事
池田 信太郎君	同
齋藤 憲彰君	遊樂部鮭魚養殖組合理事
佐藤 壽治君	元尻別川鮭人工孵化組組長
古川 慶助君	瀬棚郡漁業協同組合組長
水澤 邦郎君	十勝鮭鱈養殖水產組合副組長
堺 哲彌君	同
阿久津 香君	元擇捉島水產會技師
坂下 伊右衛門君	羅臼鮭鱈養殖組合組長
三宅川 淺太郎君	單冠灣養殖組合員

以上十九名

(12) 鮭類種卵配給統制ニ關スル件

本件ハ前總會ニ於テ役員ニ一任セラレタルニ依リ北海

委員長 一名 北海道水產課長
副委員長 二名 北海道水產孵化場長
道養魚聯合會長

(四) 委員會ノ經費

養魚聯合ニ於テ徵收スル鮭類種卵種苗配給轉手數料以外ニ本統制ニ關シ統制料ヲ徵收セスコトヲ原則トシ經費ハ道養魚聯合ニ於テ支出スルコト

(五) 事務機關

本委員會ノ事務ハ道養魚聯合ニ於テ擔當スルコト

(六) 委員會ノ存立

鮭類種卵種苗配給統制ニ關スル法令公布ニナリタルトキ迄トスルコト

二、配給統制

(一) 委員會ハ毎年三月ニ其ノ年度内ノ需給豫定計畫ヲ定メルコト

右計畫ハ關係者ニ道養魚聯合總會ニ於テ内示スルコト

(二) 前項計畫ニ基キ出荷セントスルモノハ出荷ノ指圖書ヲ委員會ヨリ受クルモノトスルコト

但シ前項ノ計畫ト實際出荷可能數量トニ過不足ヲ生ジタルトキハ速急委員會ニ報告スルモノトスルコト

- (三) 需要者ハ荷受セントスルトキハ委員會ノ荷受指圖書ノ交付ヲ受クルコトトスルコト
- (四) 出荷指圖書ヲ受ケタルモノ荷受先ト豫メ引渡場所ヲ決定ノ上引渡ヲナスコト
- (五) 本委員會及ビ道養魚聯ハ本取引ニ依リ生ジタル損害ノ賠償ノ責ハ負ハサルコト

二、收支決算

昭和十六年度決算報告

科目	經常部		臨時部		備考
	豫算	決算	豫算	決算	
收入	二、三、一、八三	三、六、三、八〇	一、六、三、九七	一、六、三、六六	
支出	二、三、一、八三	一、六、八、四〇			
差引		一、六、四、四〇		一、六、七、六六	
三月三十一日現在残金 三、二八二圓六錢也					

一、經常部

收入

科目	豫算	決算	對		說明
			増	減	
一、會費	三、四、〇、〇〇	三、八、〇、〇〇	—	五、〇、〇〇	一種會員 四九名 二二六圓 二種會員 六二名 六二圓
二、寄附金	一、一〇〇、〇〇	二、五、五、一五	一、三、五、一五	—	北海道鮭鱒保護組合ヨリノ寄附金
三、雜收入	三、〇〇、〇〇	三、六、八三	—	六、八三	豫金利子
四、過年度收入	一〇、〇〇	二、一、〇〇	一、〇、〇〇	—	
五、前年度繰越	四八、八三	四八、八三	—	—	
計	二、三、一、八三	三、六、三、八〇	一、三、五、一五	五、〇、〇〇	

支出

科目	豫算	決算	對		說明
			増	減	
一、給與	三、五〇、〇〇	一、〇〇、〇〇	—	一、五〇、〇〇	事務囑託者四名手當其ノ他
二、事務費	一、四〇、〇〇	二〇、一八	—	一、二九、八二	購入セズ
需要費	三、五〇、〇〇	—	—	三、五〇、〇〇	郵便切手、電話料
通信運搬費	五、〇〇	二〇、一八	—	三、四、八三	支出セズ
旅費	五、〇〇	—	—	五、〇〇	
三、事業費	一、六、〇〇、〇〇	一、五、〇、〇〇	—	一、一〇、〇〇	鮭鱒繁殖六〇〇部印刷代
印刷費	八五〇、〇〇	六〇〇、〇〇	—	二五〇、〇〇	
會議費	二五〇、〇〇	二七、五〇	—	二二二、五〇	總會費用

普及宣傳費	110,00	226,00	6,00	座談會費其ノ他
助成費	100,00	55,55	35,45	寄贈繪葉書二千組代一七〇圓、孵化場案内千部三十圓寄贈圖書代八七圓三〇錢醫療救急箱二十ヶ二〇〇圓其ノ他
四、雜費	80,00	81,86	1,86	
五、會長交際費	100,00	297,43	157,43	
六、豫備費	22,83	—	3,83	
計	222,83	1,668,80	223,43	

差引殘金 一、六四四圓四〇錢也 次年度へ繰越

二、臨時部 收入

科目	豫算	決算	對増減	說明
一、前年度繰越	1,633,97	1,633,97	—	
二、雜收入	10,00	13,69	3,69	預金利子
計	1,643,97	1,647,66	3,69	

支出 ナシ

差引殘金 一、六三七圓六六錢 次年度へ繰越

右滿場一致承認さる。

第二 協議事項

協議第一號 本會會解散ニ關スル件

本會ハソノ組織員ニ本道鮭鱒孵化事業關係者ヲ悉ク網羅シ多年ノ光輝アル歴史ヲ有スル團體ナルモ會員中舊孵化事業受託者關係團體ハ近ク解散セラル、コトニナリ、加フルニ本會ト同一目的ヲ持ツ北海道鮭鱒保護協力組合ガ昨年創立シタルヲ以テ之ニ一元的統合ノ要アルニ鑑ミ本會ノ事業ヲ同組合ニ引續ギ解散セントス

尙解散方法ハ左記ニ依ラントス

記

- 一、解散ニ要スル費用及ビ昭和十七年六月末日迄ニ支出シタル經費ヲ控除シタル剩餘金ハ之ヲ北海道鮭鱒保護協力組合（以下協力組合ト稱ス）ニ寄附セントス
- 二、鮭鱒彙報ハ協力組合ニ於テ引續キ刊行スルコト
- 三、解散後ノ本會員ハ協力組合ノ文化部會ノ會員トシテ加入シ得ルコト
- 文化部會ノ規程ハ協力組合ニ於テ之ヲ定メ入會ヲ勸誘スルコト

四、前項ノ部會員ニハ當分鮭鱒彙報ヲ無料頒布スルコト

右原案通り承認さる。

協議第二號 解散記念事業ニ關スル件

一、鮭鱒彙報解散記念號刊行

鮭鱒彙報第四十三號ヲ本會解散記念號ニ充テ會員ニ頒布セントス

二、功勞者ノ表彰

本會役員及ビ會員中多年本會ノ爲ニ貢獻セラレタル功勞者ニ酬ユル爲記念品ヲ贈呈セントス

右滿場一致承認せられ第二案の具體的施行方法は協力組合役員に一致することに決定せり。

表彰式

第十四回總會に引續き本道鮭鱒孵化事業民間功勞者（氏名總會記事参照）の表彰式を舉行せらるゝことになり先づ半田本會長より水澤一郎君外十八名に表彰狀及記念品を贈呈、來賓各位の祝辭の後表彰者代表水澤一郎君の謝辭あり、こゝに感激の裡に式を終了せり。

第十四回總會雜感

總會を車ねること十四回、最後の總會であつたが然し誠に掉尾を飾るに相應しい盛會さで參會者一同は大感激であつた。之は偏に地元の釧路國水産會、根室 國後、厚岸の鮭鱒養殖水産組合の各位の熱誠なる御努力の賜で感謝に堪へない次第である。

又釧路國支廳、市役所、鐵道、弟子屈村に於かれても本會の意義を宜く御共鳴下され絶大の御支援を仰いだことを出席者一同に代り謹んで感謝の意を表する次第である。

想へば本會の年中行事たるこの總會は一寸他に見られない和さを持つた會合だけに多年本會合に出席せられた會員諸氏には之が最後かと云ふ一抹の寂しさがあつた様だが、然し今後と雖も必ずあの總親和を誇る吾々の會合復活の機會は來るものと信ぜられる、その嬉しい日來る迄お互ひにその地域に於て孵化事業の爲努め様ではないか。

第十四回總會こそは參會者各位の永久忘れられない楽しい想出であつたことと思ふものである。

最後に本總會の爲に特に献身的努力を賜つた、釧路國

差引殘額 二、七七三圓二二錢也

昭和十七年六月三十日現在金 二、七七三圓二二錢

一、收入

科目	金額	説明
過年度會費收入	六、〇〇〇	一種會員一名 五圓 二種會員一名 一圓
雜收入	一、二三	銀行利子
前年度繰越金	三、八八六	
合計	三、二九六	

二、支出

科目	金額	説明
給與	三、三三	榮報第四十二號寄稿謝禮四名 三五圓二五
通信運搬費	三、〇九	
會議費	一、七二六	第十四回總會費
表彰費	一、〇七五	記念品代
雜費	八、九九	
合計	五、六〇六	

右滿場一致承認さる、

水産會の池田君、根室の富永君に厚く感謝の意を表する次第である。

七四

解散協議委員會記事

第十四回總會に於て本會解散に伴ふ一切の具體的方法を北海道鮭鱒保護協力組合役員會に一任せられたるに依り十七年七月四日札幌市グランドホテルに於て解散協議委員會を開催せり。概況左に要録す。

一、出席者

半田 芳男	大西 眞平	齋藤 主計
野田 信俊	稻垣 龍	八木澤 繁次
榎本 仁太郎	向井 勇次郎	齋藤 兵太郎
井筒 宇三郎	齋藤 榮三郎	加藤 梅太郎
片山 亮一		

提出議案

一、會計報告

昭和十七年度 自四月一日 收刈決算報告 至六月三十日

收入總額 三、二九九圓二八錢也

支出總額 五、二六四圓〇六錢也

二、協議事項

(一) 剩餘金處分方法ニ關スル件

六月三十日現在ニ於ケル本會剩餘金貳千七百七拾參圓貳拾貳錢也ヲ左記ノ通り處分セントス

- 金五百圓也 功勞者表彰費
- 金七百圓也 榮報解散記念號印刷代
- 金二百圓也 囑託員解散手當金
- 金五百圓也 協力組合文化部基金トシテ寄附
- 金七百圓也 北海道水産孵化場設備費寄附金
- 金壹百七拾參圓貳拾貳錢也 解散事務諸費

(剩餘金アルトキハ協力組合ニ寄附スルコト)

右原案通り滿場一致承認さる。

(二) 功勞者表彰ニ關スル件

功勞者の表彰方法及退職手當給付方法は會長一任に決定す。

本會功勞者記念品贈呈

本會解散に當り多年本會に盡瘁せられたる功勞者に對し記念品贈呈を第十四回總會に於て決議せられ之が實行方法に就いては北海道鮭鱒保護協力組合役員會に一任せられたるが同役員會に於ては會長一任せられたる爲人選

に當り事務當局も參畫し左記本會員は特に功勞顯著なるに鑑み記念品を夫々贈呈することに決定十一月二十八日之を施行せり。

功勞者氏名 (順不同)

半田芳男君	稻垣 龍君	野田信俊君
淺野政勝君	内海重左衛門君	八木澤繁次君
大澤寺政治君	水澤 一郎君	大西眞平君
菊地覺助君	井筒宇三郎君	齋藤主計君
齋藤憲彰君		以上十三名

會員消息

(敬稱略)

小野眞人	入替せらる
三原健夫	應召せらる
沖津哲三郎	神戸市轄合區八幡道五丁目一五三 日本寒天輪 出組合に轉出
小野政秋	北海道水産孵化場虹別支場に轉勤
押味幸一	北海道水産孵化場富幌事業場に轉勤
橋本武三郎	北海道水産孵化場富幌事業場に轉勤
郡山茂利雄	北海道水産孵化場目梨事業場に轉勤
幸内慎治郎	北海道水産孵化場十勝支場長に榮轉
小林教司	北海道水産孵化場本場に轉勤

會費領收報告

昭和十四年度分	鴨川 肇	毛利八百藏	蒲原八郎
昭和十五年度分	宮崎朝男	鳥山恒義	石井久治
	野村政男	鴨川 肇	田中林藏
	武田尙秀	岸田敏明	菊地覺助
	谷口達三	森 哲一	毛利八百藏
昭和十六年度分	蒲原八郎		
田村金太郎	久保達郎	佐野誠三	
大久保司	會田庄藏	山本勝見	
村上孝一	高山忠義	宮崎朝男	
高橋恒義	鳥山恒義	石井久治	
野村政男	渡邊定吉	石川 博	
前田珍男	佐藤三太郎	長谷川 浩吉	
表 一二	古都儀一	鴨川 肇	
磯揚富太郎	高野喜三郎	品川 金次郎	
田中林藏	片山亮一	榎本仁太郎	
岩佐忠重	大澤寺政治	小野政秋	
押味幸一	大友 涉	濱畑正男	

七六

近藤賢藏	北海道水産孵化場北見支場長に榮轉
高野喜三郎	北海道水産孵化場北見支場退職
石井久治	北海道廳技師に榮進せられ後擇提漁業株式會社に轉出
阿部 莊吉	北海道水産孵化場留別事業場に轉出
板谷 茂	北海道水産孵化場二木城事業場に轉出
佐野誠三	北海道水産孵化場虹別支場長に榮轉
原 茂	除隊 北海道水産孵化場員に復職
山本 信	除隊せらる
武田重秀	除隊せらる
中山忠衛	北海道廳水産課に轉勤

新入會員 (昭和十六年度中)

木村 健郎	北海道水産孵化場員 (本場勤務)
加藤梅太郎	北海道鮭鱒保護協力組合主事
小椋養魚組合	
川島吉郎	小椋市 養魚家
廣部幸太郎	小椋市 養魚家
渡邊寅市	小椋市 養魚家

中村一雄	早栗 操	野口正樹
高木爲吉	内海 登	鴨志田彦七
小田部景一	小田部 敬止	片桐正吉
阿部 莊吉	岸田 敏明	添田潤助
江口 弘	後山 夫	近藤賢藏
内海重左衛門	瀨谷 求馬	山本末吉
菊地覺助	谷口達三	紺野一男
鶴田 廣	森 吾一	木村 鏡郎
柴田幸一郎	水戸部 勝次	道上永吉
毛利八百藏	下山 卯之松	加藤 梅太郎
蒲原八郎	關谷 定雄	山田 準

寄稿歓迎

一、鮭鱒、淡水々族、淡水養殖、河川、湖沼等に關する理論及應用兩面の寄稿を歓迎す。

二、本誌に掲載せるものには薄謝を呈す。

三、希望別刷数は原稿に明記され度し。三〇部までは無代進呈す。

四、本誌は年二回 (八月、十二月各下旬) 發行の豫定に付原稿は發行豫定日の約一ヶ月前迄に鮭鱒彙報編輯事務局 (札幌市中ノ島北海道水産孵化場内) 宛御送附あり度し。

七七

昭和十八年六月十五日印刷
昭和十八年六月二十五日發行

編輯兼
發行人 札幌市南十六條西四丁目五番地
半田芳男

印刷人 札幌市南二條西六丁目三番地
山藤國八

札幌郡豊平町大字平岸村中之島
北海道水産孵化場内

發行所 北海道鮭鱒保護協會

電話 五三三五番
振替口座小樽二一四八番